

宮崎市の文化遺産



宮崎市教育委員会文化財課

目 次

中央地域の文化遺産（中央東・中央西・小戸地域自治区管内）	1
大宮地域の文化遺産（大宮・東大宮地域自治区管内）	6
檜地域の文化遺産（檜地域自治区管内）	13
中央南地域の文化遺産（大淀・大塚・大塚台・生目台地域自治区管内）	17
赤江地域の文化遺産（赤江地域自治区管内）	23
木花地域の文化遺産（木花地域自治区管内）	29
青島地域の文化遺産（青島地域自治区管内）	35
住吉地域の文化遺産（住吉地域自治区管内）	42
生目地域の文化遺産（生目地域自治区管内）	48
北地域の文化遺産（北地域自治区管内）	56
佐土原地域の文化遺産（佐土原地域自治区管内）	62
田野地域の文化遺産（田野地域自治区管内）	68
高岡地域の文化遺産（高岡地域自治区管内）	73
清武地域の文化遺産（清武地域自治区管内）	81

例 言

- 1 本書は、本市が推進する「市民が主役の市民のためのきずな社会づくり」を目的とした、地域魅力発信プラン策定のための補助資料として作成したもので、宮崎市内に現存する文化遺産について紹介した冊子です。
- 2 国・県・市指定（登録）文化財のほか、地域に残る神社仏閣、城跡、石塔、植物、民俗芸能、伝説、民話など、地域の歴史や文化財にまつわる文化遺産について、位置を地図で示し、写真や解説文によって紹介しています。
- 3 本書で取り扱う地域は、『宮崎市環境基本計画（第3次計画）』（平成30年3月策定）を参考に、地域の特性等に応じて14地域に区分して紹介しています。
- 4 各文化遺産の説明は、特に本文中でことわらない限り、本市で作成した文化財パンフレット等の解説文や各地域の町史・郷土史の類、『宮崎県史』各巻、『宮崎県神社史』（宮崎県神社庁発行）などを参考にして作成しています。

中央地域の文化遺産

(中央東・中央西・小戸地域自治区管内)

【地域の歴史と特色】

市内中心部に位置する中央地域は、大淀川北岸に形成された沖積低地で、古くは宇佐八幡宮の荘園であった渡別府の所在地と推定されています。

江戸時代には、飢肥藩領であった旧恒久村分（瀬頭・松山・吾妻町・堀川町）を除くと、ほとんどの地域が延岡藩領（旧上別府村・池内村・下北方村）に属していました（一時、幕府領の時期あり）。往還筋にあった上野町には、対岸の中村町への渡場があり、旅人宿が置かれるなど、人と物資の集散地として賑わいを見せました。

明治6年（1873）、宮崎県が成立すると宮崎郡上別府村に県庁が置かれました。また、大正～昭和初期にかけては、鉄道開通を契機として急速に発展し、現在の市街地の原形が形成されました。

【文化遺産マップ】



① 宮崎県庁

みやざきけんちょうほんかん

📷 宮崎県庁本館（国登録有形文化財）

宮崎県庁本館は、総工費約72万円（当時の予算）をかけて建設が行われ、昭和7年（1932）10月に完成しました。鉄筋コンクリート造、地上4階・地下1階建てで、設計は、茨城県庁をはじめ、多くの公共建築物の設計を手がけた置塩章によるものです。建築様式にはネオ・ゴシック建築が取り入れられており、戦前に建てられたものとしては数少ない、貴重な近代建築物の一つとなっています。

昭和7年は、宮崎県庁のほか、橘橋（永久橋）の架け替えや橘通りの拡張などの大事業が行われ、中心市街地の装いが一新した年となりました。



きゅうだいいちかんぎょうぎんこう

📷 旧第一勧業銀行（景観重要建造物）

宮崎県庁5号館（宮崎県文書センター）は、宮崎農工銀行として大正15年（1927）に建築され、後に第一勧業銀行宮崎支店の建物として使用されていました。宮崎県内でも珍しいレンガ貼りの外観は、近代化の道を歩んだ県都発展のシンボルとして、現在もその景観を残しています。



けんちょうまえのふえにつくす

📷 県庁前のフェニックス（景観重要樹木）

フェニックスは、宮崎県の県木となっており、南国宮崎を代表する樹木として、市内各地の観光地や学校などに植樹されました。特に、国登録有形文化財に指定されている宮崎県庁本館前にそびえる2本のフェニックスは、樹高が高く、樹形も良好で、市民・県民・観光客など多くの人々に親しまれています。



いけだけじゅうたくしゅおく

② 池田家住宅主屋（国登録有形文化財）

池田家住宅は、大正から昭和初期にかけて全国で数多く建設された和洋折衷の都市住宅の一つです。和風部分の北東に付属した応接間は、傾斜のきつい棧瓦葺き切妻屋根で、屋根窓を設け、外壁は下見板張やタイル貼とした洋風意匠となっています。設計者や施工業者は分かっていませんが、昭和初期に、弁護士で小林町（現小林市）の町長などを務めた森由己雄の邸宅として建てられたと伝えられています。

住宅前の通りは、明治から大正期にかけて宮崎に滞在したアメリカ人宣教師シ・エ・クラークが近くに居を構えたことに因んで、通称「クラーク通り」と呼ばれています。池田家住宅は、この界限に数多く見られた和洋折衷住宅の中で、現在に残る数少ない貴重な文化遺産となっています。



し・え・くらーくどうぞう

③ シ・エ・クラーク銅像

栄町街区公園の一角に、アメリカ人宣教師シ・エ・クラーク（1851-1933）の銅像があります。

シ・エ・クラークは、明治25年（1892）から大正14年（1925）までの約34年間、現在の日本赤十字社宮崎県支部の辺りに居を構え、キリスト教の布教に努めるとともに、日向訓盲院（現在の県立明星視覚支援学校）の設立に尽力しました。また、宮崎県にはじめて自転車を輸入し、後には自動車を自ら運転するなど、アメリカ文化を県内に積極的に移入した人物として知られています。

帰国後に死去しましたが、遺言により、夫人が眠る市内春の山墓地に葬られました。



さいごうたかもりちゅうとんちあと

④ 西郷隆盛駐屯地跡

南広島通りの一角に「西郷隆盛駐在跡」碑と「敬天愛人」碑があります。

明治10年（1877）5月、薩軍は宮崎本営の名で鹿児島県宮崎支庁に対し軍政を布告し、支庁を「軍務所」と改称して、募兵と資金調達を開始しました。その際、桐野利秋が川原町の旧宮崎県権令の官舎、島津啓次郎が中村町の福島邦成邸、そして西郷隆盛が南広島通りの一農家など、各所に薩軍要人の官舎が置かれました。西郷の宿舎では、私学校党が昼夜付近を警備し、近所の町民は西郷の姿をほとんど見るができなかったと言われています。



みやざきはちまんぐう

⑤ 宮崎八幡宮

創設年代は不明ですが、国司海為隆のとき、宇佐八幡宮領として渡別府が立券された際、その鎮守として勧請されたと考えられています。明暦2年（1656）の棟札には「渡別府村八幡宮」、延宝5年（1677）の棟札には「渡別府八幡宮」とあり、大檀那には延岡藩主有馬康純の名が記されています。

古くは、毎年9月の祭礼において、神馬3疋・流鏝馬1疋で神事が勤められ、その諸入用は上別府村内で高割されていました。



もくそうあみだによらいざそういっく

⑥ 木造阿弥陀如来坐像一軀（県有形文化財）

木造阿弥陀如来坐像一軀は、宮崎市老松通の観音堂に祀られていたもので、現在は宮崎県総合博物館に保管されています。像高50.2cm、ヒノキの寄木造の坐像で、螺髪（らはつ）は細かく整い、面相にも穏やかな彫り口の目鼻立ちを刻んでいます。平安時代末期の作に見られる如来像の特徴をよく備えているということで、昭和40年8月17日に、宮崎市で初めて県の有形文化財に指定されました。



えひらいけ

⑦ 江平池

現在の西池地区には、かつて江平池と呼ばれた大きな溜め池がありました。

江平池には、江平東池と江平西池があり、江平東池は、すでに延享4年（1747）の記録に溜め池として記されています。当時でも、いつ設けられたか分からない程古い溜め池だったようで、大きさは南北約400m、東西約800m余もありました。

その後、東池は昭和4年（1929）～7年頃に埋め立てられ、昭和25年（1950）頃には、残った江平西池で貸しボートが浮かべられましたが、この西池も昭和30年頃から埋め立てられてしまいました。

現在の江平東池跡には江平小学校、江平西池跡には西池小学校がそれぞれ建てられています。



旧江平東池跡地(現江平小学校敷地内)



旧江平西池跡地(現西池小学校敷地内)

おどのわたし
⑧ 小戸の渡

大淀川の最下流は、古くから「小戸の渡」と呼ばれています。宮崎市役所の東玄関近くには、この地を訪れた伊東義祐が神代の時代に思いをはせて詠んだと言われる歌碑が立てられています。

「神代よりその名はいまも橋や
小戸のわたりの船の行く末」

おどじんじゃ
⑨ 小戸神社

小戸神社は、旧称を「小戸大明神」といい、社伝によると約1900年前の景行天皇の勅により創建されたと伝えられています。

歴代伊東氏当主の崇敬は篤く、都於郡城主伊東祐堯によって文明5年(1473)に社殿の造営が、延徳2年(1490)にその修復が行われ、この頃には30町もの神領を有していました。その後、数回の造営が行われましたが、戦国期の相次ぐ戦乱により宝物や旧記等はことごとく失われたと言われています。

当初の社地は下別府にありましたが、寛文2年(1662)の大地震(通称外所地震)により上野町に遷座しました。寛政4年(1792)には、高山彦九郎が中村町から上野町へ渡り、その日記に小戸大明神の御旅所を拝したと記されています。

明治維新後に「小戸神社」と改称し、さらに、昭和9年(1934)の橋通りの拡張により現在地へ遷座しました。

なお、境内は、宮崎市の「緑の保全地区」に指定されています。



おどじんじゃのおがたまのき
📷 小戸神社のオガタマノキ

小戸神社の神門をくぐり境内に入ると、姿の美しいオガタマの神木が迎えてくれます。一説によると、芸能の神として崇められるアメノウズメノミコトは、このオガタマの木の実を振りながら踊ったと言われています。また、この実の形から「神楽鈴」が作られたとも言われています。

オガタマの木は、「招魂(おぎたま)」が訛ったものといわれ、神社に多く植えられており、古来から人々に神木として崇められてきました。



大宮地域の文化遺産 (大宮・東大宮地域自治区管内)

【地域の歴史と特色】

大宮地域は、南流する大淀川左岸に位置し、古くは宇佐八幡宮領宮崎庄として開発されました。現在でも、その当時の名称「北方」「南方」の名残りとして、「下北方町」「南方町」の地名が残っています。

中世には、伊東氏と島津氏の争奪の地となりましたが、15世紀前半には伊東氏の所領となり、その直轄領として代官が置かれました。

近世は、下北方村・名田村・池内村・南方村に分かれ、延岡藩領となり（一時、幕府領の時期あり）、下北方村には藩の宮崎陣屋が置かれました。

【文化遺産マップ】



大宮地区

みやざきじんぐう

① 宮崎神宮



みやざきじんぐうしゃでん

宮崎神宮社殿（国登録有形文化財）

宮崎神宮の祭神は神武天皇で、古くは神武天皇宮、舟塚宮とも称しました。

明治32年（1899）9月に催された神武天皇御降誕二千六百年大祭を機に大造営が計画され、足掛け8年の月日を費やし、同40年（1907）10月に完成しました。

伊東忠太の設計により造営された社殿群は、神殿・幣殿・渡殿・神饌所・御料屋・透間垣・拝所・正門・玉垣・石柵から成り、左右対称の配置と復古的で端正な社殿形式に特徴が見られます。



みやざきじんぐうちょうこかん

宮崎神宮徴古館（国登録有形文化財）

明治42年（1909）3月、宮崎神宮の宝物や書籍を陳列し、保存する目的で建築されました。神宮に残る棟札には、工事設計者として皇室技芸員に任命されていた佐々木岩次郎の名が記されています。

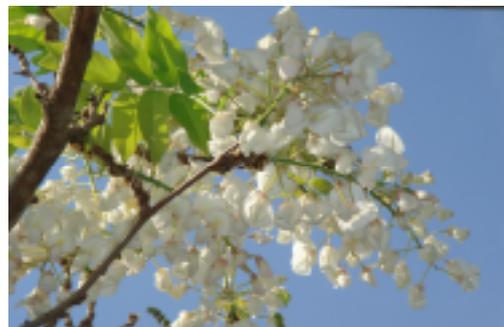
木造2階建て、寄棟造妻入棧瓦葺きの建物の正面には、切妻屋根の玄関が配置され、外壁全体を覆う「なまこ瓦」に特徴が見られます。



みやざきじんぐうのおおしらふじ

宮崎神宮のおオシラフジ（国天然記念物）

境内（本殿の東南）にあるオオシラフジは、中国原産で、同種のなかでは最も大きい樹木とされています。根元周りは約3mあり、地上約11mのところできつに分岐しています。5月中旬頃には、ゆらゆらと真白で大きな花を咲かせ、人々の目を楽しませてくれます。指定名称：宮崎神社のおオシラフジ



ふなつかこふん
📷 船塚古墳（県史跡）

船塚古墳は、宮崎神宮本殿の北側に位置する前方後円墳です。前方部の裾がやや広がる古墳時代中期末ないし後期に築造された古墳として形状を良く残していることから、昭和52年4月1日に県の史跡に指定されました。



やぶさめしんじ
📷 流鏝馬神事

宮崎神宮の流鏝馬神事は、古くは「ヤクサミの神事」と称し、百井塘雨（もものいとう、?-1794）の『笈埃（きゅうあい）随筆』に、その頃の様子が記されています。それによると、毎年秋の祭礼日に盛大に催され、開始前には神前において礼式を行っていましたが、その実は競馬として行われており、本来の姿とは程遠いものであったようです。

昭和15年（1940）、紀元二千六百年祭奉祝記念事業の一環として流鏝馬馬場が新造され、小笠原流の斉藤直芳に指導を仰ぎ、それ以前の古式も尊重して、「古式流鏝馬」が再興されました。現在は、毎年4月3日に五穀豊穰を祈る神事として執り行なわれています。

みやざきけんそうごうはくぶつかん・みんかえん
② 宮崎県総合博物館・民家園

きゅうくろぎけじゅうたく
📷 旧黒木家住宅（国重要文化財）

宮崎県総合博物館の敷地内にある旧黒木家住宅は、高原町祓川地区にあった郷土屋敷の建物を移築復元したものです。南九州に見られる分棟型民家の典型で、居室部分（オモテ）と土間部分（ナカエ）を別棟にし、「テノマ」と呼ばれる板敷きの間で結んでいます。「オモテ」「ナカエ」の分離・接合が比較的自由に行われやすい中で、双方の年代が揃っていることは貴重で、この形式の民家の好例といえます。

建築年代は、解体工事の際に発見された墨書によって、天保5年（1834）から2年間かけて建てられたことが分かっています。



きゅうふじたけじゅうたく
 旧藤田家住宅（国重要文化財）

旧藤田家住宅は、九州山地に囲まれた五ヶ瀬町の山村にあった農家で、昭和48年2月23日に国の重要文化財に指定された後、宮崎県総合博物館敷地内に移築・保存されました。この建造物は、県内で確認された民家としては最古で、間仕切柱の刻銘により、天明7年（1787）に建てられたことが分かっています。九州山地中央部に残る民家の古い形式を伝える数少ない建物として、現在も大切に保存されています。



つちもちもんじょ
 土持文書（県有形文化財）

高岡町の清水（きよみず）家に代々伝えられてきた土持一族に関する文書群で、中世日向の歴史を知る上で最も貴重な文書の一つとして評価されています。

土持氏は、中世日向における代表的豪族で、在庁官人、郡司、地頭などを一族で占め、南北朝期には武家方に属して活躍しました。清水家は土持七党の一家で、文書群には系図一冊を含む計30冊があり、大部分は南北朝期の軍忠状・感状・挙状・安堵状などで占められています。



みやざきししもきたかたこふん
 ③ 宮崎市下北方古墳（県史跡）

昭和14年（1939）に、前方後円墳4基、円墳12基の計16基が県の史跡に指定されました。現在は前方後円墳4基、円墳9基を確認することができます。古墳群が立地する丘陵頂部に位置する13号墳は、全長約96mの前方後円墳で、円筒埴輪のほか、南九州では珍しい形象埴輪も出土しています。これに1号墳（前方後円墳、全長約78m）、3号墳（前方後円墳、全長約74m）と続き、築造の時期は、5世紀末から6世紀中頃と考えられています。

下北方5号地下式横穴墓は、昭和50年7月1日に9号墳の裾部分を開墾中に発見されました。玄室からは、金製垂飾付耳飾、銀装大刀をはじめ武器、武器、馬具、農工具、青銅鏡、玉類などの多量の副葬品が出土しました。これらは同時期の日本各地にある有力古墳と遜色のないもので、当時の九州南部の古墳文化の特質や日本列島の古墳時代社会のあり方を知るうえで重要な資料ということで、令和2年に国の重要文化財に指定され、現在は宮崎市生目の杜遊古館で見ることができます。



宮崎県下北方5号地下式横穴墓出土品
 （国重要文化財）

いけうちよこあな

④ 池内横穴（県史跡）

現在、平和ヶ丘団地となっている丘陵には、大小合わせて33基の横穴がありましたが、昭和43年に行われた団地造成により、4基の代表的な横穴を残し、他の29基は消滅してしまいました。現在は、この4基が県の史跡に指定されています。

横穴は、山の斜面に穴を彫り、死者を葬った墓の一種で、古墳時代後期を中心に造られました。



みやざきじょうあと

⑤ 宮崎城跡

宮崎城は、池内町の南北方向に連なる標高93mの丘陵上にあり、宮崎平野を一望できる要害の地に立地しています。池内城とも称し、丘陵の尾根筋に曲輪群を連ねる大規模な城郭は、南北700m、東西約500mに及びます。

文献史料における初出は建武3年(1336、北朝年号)で、南朝方に味方した凶師六郎入道慈円が池内城に立て籠もり、北朝方の土持宣栄に攻められたとあります。『上井覚兼日記』には、天正8年(1580)に、島津氏の老中上井覚兼が宮崎地頭として宮崎城に入り、城内鎮護の毘沙門堂を建立したり、弓場普請を行ったことが記されています。また、同16年には、高橋元種領となり、城主として権藤種盛が入りましたが、慶長5年(1600)の関ヶ原合戦直後には、伊東氏家臣稲津掃部助に攻められ、落城しています。

池内地区に伝わる金閣寺踊りは、宮崎城主上井覚兼が、京都を中心に武家の間で愛好された幸若舞を庶民に普及したのが起源といわれています。現在は、宮崎市の民俗芸能として登録され、有志保存会により伝承されています。



民俗芸能 和田の金閣寺踊り



なごじんじゃ
⑥ 奈古神社

古くは奈古八幡宮と称し、宇佐八幡宮領宮崎庄の成立とともにその鎮守として勧請されたと考えられています。宝治元年（1247）の同社所蔵文書には、海清久が奈古社大宮司に補任されたとあり、その後も海氏が当社の大宮司職を世襲しました。

弘治2年（1556）の「土田帳」（予章館文書）には、「那古八幡」と見え、南方・池内方・北方萩原などに合わせて5町4段と屋敷2ヶ所が社領として記されています。

慶長18年（1613）の神領は高10石で、屋敷2反余を合わせて1町余あり、大祭時には延岡藩代官の社参が通例として行われました。また、内藤氏の入部以降は、藩主代参となり、祈願所として位置付けられました。



さたじあと
⑦ 沙汰寺跡

下北方塚原にあった真言宗寺院で、『上井覚兼日記』によれば、天正12年（1584）2月22日に、宮崎地頭上井覚兼が、当寺境内で行われた蹴鞠を見物するためにこの寺を訪れています。

江戸時代は古城村の伊満福寺末寺で、元禄11年（1698）の奈古八幡神社文書によれば、高10石が除地とされています。明治3年（1870）に廃寺となり、現在は、その時代を物語る古石塔が残されています。

📷 かげきよびょう
景清廟

沙汰寺跡の境内には、平景清を祀った景清廟があります。景清は、平家滅亡後に日向国に下向し、宮崎郡内で300町を領し、宇佐・巖島・稲荷の三神を勧請して古城に八幡宮を建立したと伝えられています。

境内には平景清の墓と伝えられる石塔があり、寛政4年（1792）に下北方村を訪れた高山彦九郎は「筑紫日記」に、「薬師堂南向右に水鑑景清大居士墓、西向千手石、並ひて社の如く覆ひ有り、行人削りて目の為、瘡の為メにす、景清墓二尺、高サ五尺余有り、古の墓碑は沙法（汰）寺に納むと云ふ」と記しています。



東大宮地区

おおしまじんじゃ

⑧ 大島神社

大島神社には、農業の神様であるアマツヒコホニニギノミコトと、学問の神様である菅原道真公が祀られており、受験生等の参拝も多く見られます。

神社に残る棟札によると、約500年前には神社があったものと考えられます。

この神社で、明治の初めから約100年もの間受け継がれてきたのが、大島神社神楽です。神楽の由来は定かではありませんが、大島神社創建と同時に伝えられてきたと言われています。神楽の間には厄払いの式典が行われ、厄払いと豊作祈願の神楽として舞い継がれてきました。春社日と大晦日に奉納され、夏祭りには獅子舞が町中を練り歩きます。神楽を後世まで残していこうと、若者たちが立ち上がり大島神社神楽保存会を発足させ、活動しています。



民俗芸能 大島神社神楽

たかやじんじゃ

⑨ 高屋神社

祭神はヒコホホデミノミコト・トヨタマヒメノミコト・景行天皇で、高屋八幡宮・高屋宮とも称し、宇佐八幡宮領村角別府の鎮守として勧請されました。境内は、クマソ征伐のために日向国を訪れた景行天皇が約6年にわたり滞在した「高屋宮（たかやのみや）」の跡、又は日本書記に記されるヒコホホデミノミコトの陵墓「高屋山上陵（たかやのやまのうえのみささぎ）」の伝承地の一つとされています。

弘治2年（1556）の「土田帳」（予章館文書）によれば、村角の内に村角八幡宮領として3町の免田と屋敷3ヶ所、村角正祝子分として田1町6反と屋敷1ヶ所があったと記されています。

境内で奉納される高屋神社神楽は、由来は定かではありませんが、享保14年（1729）銘の神楽面が残ることから、江戸時代前期には舞われていたと考えられています。毎年3月の春社日に、厄払いと五穀豊穰を祈念して奉納され、神楽の間には厄払いの式典が行われます。



民俗芸能 高屋神社神楽(市無形民俗文化財)

櫛地域の文化遺産 (櫛地域自治区管内)

【地域の歴史と特色】

市内中心部の東側に位置する櫛地域は、南は大淀川左岸、東は日向灘に面しており、地域内を新別府川、江田川、産母川が流れています。

現在の櫛地域は、江戸時代の日向国那珂郡の江田村、新別府村、吉村、山崎村が明治22年の町村制の施行で合併した際に、日本書紀に記されている「櫛原」の文字をとって「櫛村」としたのがはじまりです。

地形上の大きな特徴は、大淀川と並行に流れる新別府川を境として北方向にのびる4本の砂丘列です。西から第1砂丘（大島砂丘）第2砂丘（山崎砂丘）第3砂丘（五厘橋砂丘）第4砂丘（一ツ葉浜）が形成されています。

この砂丘を中心として、弥生時代前期の甕棺などが出土した櫛遺跡や中期から後期にかけての石神遺跡、そして櫛古墳群があります。

【文化遺産マップ】



あおきこふんぐん

① 憶古墳群

旧憶村域に散在する古墳の総称で、新別府町江田原・麓地区には、前方後円墳2基と円墳2基があるとされていました。平成12～15年に宮崎大学によって憶1号墳が、平成22年度には宮崎市教育委員会によって、麓地区の前方後円墳とされていた（麓2号墳）が調査されました（調査により、麓2号墳は古墳でないことが確認されました）。

また、山崎町下原地区には、円墳3基が現存します。このほか、村角・大島地区の円墳3基を含めて、憶古墳群と呼んでいます。

あおきいちごふん

📷 憶1号墳

憶中学校の南側、新別府川に接する砂丘の先端に位置する前方後円墳です。墳長は52mで、前方部が撥形に開く古墳時代前期の特徴を有しています。木郭（木棺を収めるための木組みで作られた入れもの）と見られる埋葬主体部が発見されたことから、その当時は県内最古の古墳とも言われましたが、現在は出土した土器から4世紀前半から中頃の古墳と考えられています。

やまさきしものほるだいいちいせき

② 山崎下ノ原第1遺跡

県道整備に伴い平成12年度に県埋蔵文化財センターが調査しました。下原地区にある憶5号墳・6号墳周辺で、滅失古墳3基や土坑墓、馬埋葬土坑が確認されました。滅失古墳からは鏡や太刀、馬埋設土坑からは馬具などが出土しています。

しょうこうじかんのんどう（あみかけかんのん）

③ 正光寺観音堂（網掛観音）

本尊は十一面観音で、漁夫が海中から光輝く観音菩薩を引き上げたという由来から網掛観音と呼ばれています。

開基和尚は笑翁玄泰（大永2年（1522）寂）で、15世紀末から16世紀初頭の創建と考えられています。『日向地誌』には、源頼朝のために創建したと記されています。

廃寺となった現在は、観音堂が建立され、本尊網掛観音や石塔群が大切に残されています。



しもべっぴいちじいっせききょうづか
④ 下別府一字一石経塚

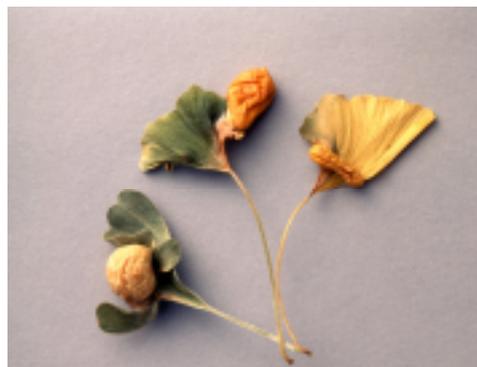
享保15年(1730)に建立された一字一石塔です。
一字一石塔とは、経文を一字ずつ書写した小石を地に埋め、その上に石塔を建てたもので、下別府一字一石経塚では、主に法華三部経を書写した68,000個余の経石が埋納壙から出土しました。

当初は、吉村町南今村、県道島之内一の宮線の東にありましたが、県道改良工事に伴い移されることになり、昭和61年に宮崎県教育委員会が調査しました。現在、碑石と基壇は、一の宮交差点近くの浄土院に移築されています。



てんりんじのおはつきいちょう
⑤ 天林寺のオハツキイチョウ（県天然記念物）

オハツキイチョウとは、葉の上に実をつける異常果で、葉の左右の外側中央部に2~3果、また一側のみにも1~3果、まれに葉の内側の葉脈上に1~2果つけることもあります。この木は天林寺境内にありますが、平成5年の台風で根元から折れ、現在、再生を図っているところです。



えだじんじゃ
⑥ 江田神社

祭神はイザナギノミコト、イザナミノミコトで、『延喜式神名帳』には「宮崎郡一座江田神社」とあり、日向式内四社の一つに位置付けられています。

創建の年代は詳らかではありませんが、承和4年(837)に官社に列し(続日本後紀)、日本三代実録にも記録が残ります。

天正12年(1584)3月8日、宮崎城主上井覚兼は、江田大宮司の所で蹴鞠をし、当社に宿泊しています(『上井覚兼日記』)。



ひとつばいなりじんじゃ
⑦ 一ツ葉稲荷神社

『江田住吉縁起』によれば、貞享年間（1684-88）までは「一ツ葉の松頭現」（一葉稲荷）と称されていました。

祭神に五穀豊穰の神とされる倉稲魂命（うかのみたまのみこと）を祀り、毎年春の例大祭には神楽が奉納されています。現在は4番が継承され、鬼神面などの神楽面や装束が残されています。



ぐんようどうろ
⑧ 軍用道路

市道松林中線は、通称「軍用道路」と呼ばれていました。『憶郷土史』によると、昭和10年（1935）陸軍大演習が宮崎地方で実施されるに当たり、軍が兵員、軍需物資の輸送専用道路として整備したとのことですが、リゾート開発に伴いそのほとんどがなくなりました。

現在では、宮崎県教育研修センターの北側の一部が残されているのみです。

だんやくこ
⑨ 弾薬庫跡

中西町の住宅街の中、田んぼの一角に弾薬庫跡が残っています。『憶郷土史』によると、昭和19年（1944）の秋頃、赤江飛行場を守るため、中西町に海軍高射砲隊北村部隊が陣地を構築したとあり、その時に作られたものと考えられます。このほか、旧海軍赤江飛行場（現宮崎空港）の近くの畑の中にも弾薬庫3基が残っています。



中央南地域の文化遺産 (大淀・大塚・大塚台・生目台地域自治区管内)

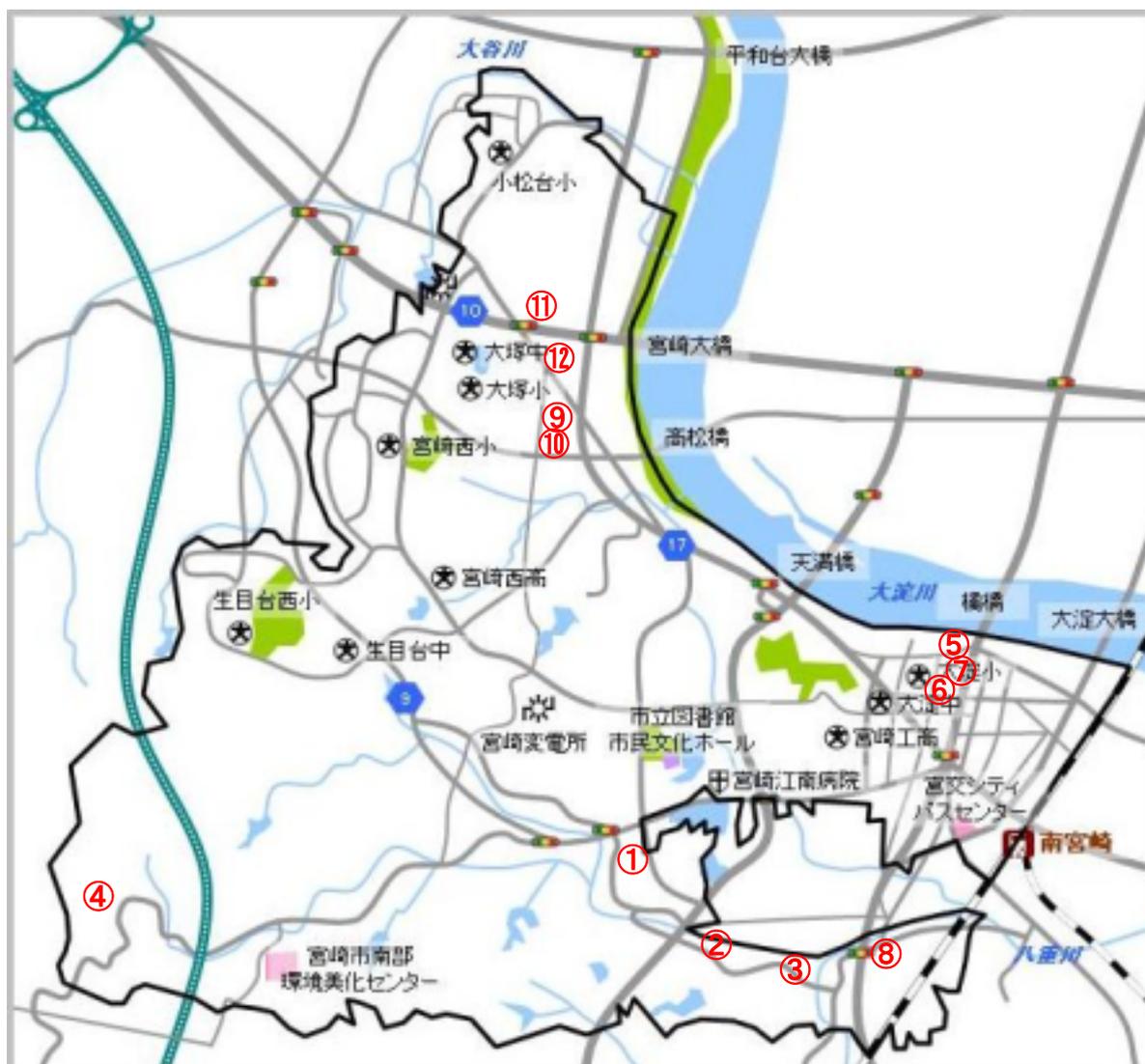
【地域の歴史と特色】

中央南地域は、大淀川下流の右岸に位置し、河川に接する北東部には沖積低地が広がり、南西部には標高20m前後の丘陵が連なっています。

「建久凶田帳」には、宇佐八幡宮領に「大墓別府二十丁」、八条女院領国富庄一円庄内に「太田百丁」と記され、それぞれ現在の大塚町付近、大淀付近に比定されています。

近世は、太田村・古城村・大塚村に分かれ、延岡藩領（一時、幕府領の時期あり）に属しました。太田村に含まれる中村町には大淀川の渡場があり、同町の北西にあった福島町とともに、物資の集散地として栄えました。

【文化遺産マップ】



大淀地区

いまふくじ

① 伊満福寺

真言宗伊満福寺は、山号を池上山といい、日向七堂伽藍の一つにも数えられています。寺伝によれば、推古天皇21年（613）、聖徳太子の命により、天皇の勅願所として百済の官人日羅が開山したと伝えられています。

室町時代は伊東氏の庇護を受け、祈祷所として寺領64町を拝領しています。戦国期には無住職となるなど荒廃した時期がありましたが、再び伊東氏領となってからは曾井城の祈祷所となり、領主の庇護を受けました。

江戸時代に記された「宮崎役所万覚」（内藤家文書）によれば、延岡藩牧野氏の時代に代官所の祈願所に命ぜられ、村方の五穀豊穰を祈祷し、守札を代官所へ進上したと記されています。都於郡（西都市）の黒貫寺や鶴戸（日南市）の仁王護国寺とも密接な関係にあり、真言宗として宮崎地方に一大勢力を持った寺院として栄えました。

明治4年（1871）の廃仏毀釈で廃寺となり、大塚長久寺の管理となりましたが、再び明治17年に復寺して現在に至っています。

観音堂には、日羅が持参したと伝えられる聖観世音菩薩像が、本堂には古城出身の仏師串間円立院作の不動明王像と両脇侍が安置されています。

境内には木崎出身の仏師平賀快然作の仁王像、円立院作の六地藏・阿弥陀如来像など多くの石仏があります。古城は良質な石の産地であることが、このように多くの石仏が祀られている要因の一つになったと考えられています。



ごとうじあと

② 護東寺跡

伊満福寺の南東およそ500mの小高い丘の上に護東寺跡があります。

山号を宝來山と言ひ、元禄12年（1699）に伊満福寺49世法印頼雄によって開山され、明治15年（1882）頃まで続いたと言われています。

現在は、境内に薬師堂・阿弥陀堂があり、護東寺第6代住職をつとめた串間円立院作の弘法大師、阿弥陀如来、地藏菩薩など多数の石仏が立ち並んでいます。

護東寺に関する文書が残されていないため、その全容を知ることはできませんが、真言宗伊満福寺との関係からその修験道場であったと考えられています。



くしまえんりゅういん
③ 串間円立院の墓

後藤寺迫の共同墓地に、仏師串間円立院（1748-1834）の墓があります。

串間氏は、もともと飢肥藩領曾井（現宮崎市大字恒久）の出身で、古城の護東寺の住職を代々務めてきた家柄です。円立院自身も護東寺の第6代住職であり、峰入り修行を行うなど修験僧として活動しました。その墓碑銘や護東寺跡の稲荷大明神守護塔の銘文から、大峰山での3回の峰入り修行と奥駈け行を行い、三所権現に詣でたということが分かります。

当時の修行には、奥駈け・山籠りのほか、廻国巡礼、仏像彫刻、木喰戒などがあり、円立院も修行の一環として仏像彫刻を行いました。現在、円立院彫作で確認されている仏像は362体で、そのほとんどが石仏です。50歳までは神像や仁王像など大作を彫像しましたが、晩年には弘法大師像や役の行者像など比較的小さな仏像を建立するようになりました。



ふるじょうじんじや
④ 古城神社

明治2年（1869）の『延岡藩調書』によれば、古城神社は享保4年（1719）に勧請されたと記されています。祭神はオオヤマヅミノミコト、アマツヒコホホノニギノミコト、コノハナサクヤヒメで、毎年春分の日には古城地区の五穀豊穰を祈願して春神楽15番が奉納されています。



民俗芸能 古城神社神楽

たちばなばし
⑤ 橋橋

初代橋橋（現在は7代目）は、明治13年（1880）に中村町の医師福島邦成によって初めて架けられました。

福島邦成が生まれたのは、文政2年（1819）。17歳の時に江戸・京都・大阪に上って西洋医学・薬学を修めて医師となり、後に中村町へ帰り、医師として延岡藩に仕えました。

明治12年（1879）、60歳となった邦成は、大淀川架橋の必要性を唱え、翌13年に私財を投じて初代橋橋を架橋しました。

邦成は、自ら橋橋と命名し、渡り賃を取ったため「退庵（邦成）は大きな箸（橋）で飯を食ひ」と川柳に詠われました。

明治17年（1884）に、県によって2代目橋橋が架け替えられ、その後は流失を繰り返しましたが、その度に架け替えられて現在に至っています。



2代目橋橋（明治21年架橋）

⑥ 中村町

大淀川の南岸、中村町は江戸から明治時代にかけて栄えた街です。その語源は中心を意味する「那珂」に由来すると言われていています。

伊東氏滅亡後、天正13年（1585）に島津氏による町立が行われました。その際、都於郡伊東氏の家臣であった黒木家他13軒がこの地に移り住んだのが始まりであると伝えられています。

江戸時代は延岡藩領・幕府領と何度か帰属が変わりましたが、古城の伊満福寺の門前町、あるいは飢肥藩領城ヶ崎とともに交通運輸の中心として栄えました。やがて西側の新開地に新花街が出現すると、三枘屋、関屋、河内屋、名月屋、金子屋などの遊郭が軒を並べるようになり、その繁栄は明治の中頃まで続きました。

中村西二丁目は、最近まで遊郭の瓦で作られたという瓦畳の舗装路が残されていました。

⑦ 最勝寺跡

源藤交差点南西の高台に最勝寺跡があります。

山号を初瀬山といい、旧寺名を長命寺と称しました。真言宗伊満福寺の末寺で、開山年代及び開基者は不詳ですが、『日向記』には、天正18年（1590）に伊東祐兵が長命寺に立て籠もった義賢（祐兵の甥）派36人を攻め、24人を討ち取ったと記されています。

現在は宅地造成のため、小さな仏堂が残されているのみですが、境内には串間円立院作の弘法大師像など、いくつかの石仏が残されています。



⑧ 両国橋

源藤交差点東側の旧道に両国橋という橋がかかっており、古くは飢肥街道にかかる橋として親しまれていました。八重川を挟んで北が延岡藩、南が飢肥藩と分かれていたため、両国橋と名付けられたと伝えられています。

また、『日向地誌』には、飢肥伊東氏と延岡内藤氏が協力して架したため、地元の人たちから寄合橋と呼ばれたとも記されています。



大塚地区

ちょうきゅうじ

◎ 長久寺

真言宗長久寺は、山号を蓬莱山といい、永禄6年（1563）に創建されたと伝えられています。江戸時代は伊満福寺の末寺でしたが、明治4年（1871）に伊満福寺が廃せられると、同寺の名前をとって伊満福寺と改称しました。そして、同17年（1884）に、伊満福寺が復寺すると、再び寺号を長久寺に復しました。



もくそうろくかんのんぞう

📷 木造六観音像（市有形文化財）

長久寺の本尊、木造六観音像は、像高は34.3～36.5cmで（写真左から順に）十一面観音、千手観音、准胝観音、馬頭観音、如意輪観音、聖観音で構成されています。像の頭部内面や台座には「永禄六年」「奈良宿院仏師源次」などの墨書銘が見られ、宿院仏師の作であることが知られています。

宿院仏師とは、16世紀に奈良宿院町を中心に活躍した仏師集団です。その出自は建築土木の木工事に携わった番匠といわれ、仏師として自立した後も、俗名をそのまま作者名とすることから俗人仏師とも言われています。

木造六観音像のように製作年や作者が判明している作品は珍しく、当時の奈良と宮崎との文化交流を知る上で貴重な資料として高く評価されています。



もくそうこうぼうだいしぞう

📷 木造弘法大師像（市有形文化財）

木造弘法大師像は、像高81.0cm、像内に「永禄六年八月」「作者 源次 原四郎 源五郎 良紹」の墨書があることから、宿院仏師一門である源次とその息子たちの作品であることが分かっています。

先に紹介した木造六観音像とともに、奈良宿院町の工房で製作され、宮崎に運ばれてきたと考えられています。

正徳4年（1714）に、仏師甲斐権右衛門重慶により修理・彩色が施されています。



ほうらいさんじょうあと

⑩ 蓬萊山城跡

長久寺がある蓬萊山は中世の山城です。『延陵世鑑』には、梶（現延岡市）領主土持宣弘（宮崎土持氏の祖）が永徳年間（1381-84、北朝年号）に築城したとあり、田部姓土持氏系図には、建武2年（1335）に土持宣栄が居城としたと記されています。標高は34mで、主郭の周りには二段の帯曲輪が巡り、東麓の長久寺側には腰曲輪を配しています。

この付近の地名である「城の下」は、この城に由来すると考えられています。

みやざきしおおよどこふん

⑪ 宮崎市大淀古墳（県史跡）

宮崎市大淀古墳は、大淀川の右岸、標高7～8mの低地帯に位置しています。

大塚の地名は、古くは「大墓」とも書き、「数多くの古墳」という意味に由来していると言われています。

現在、大塚町には前方後円墳2基、円墳3基、横穴1基が残されています。3号墳は前方後円墳として指定されていますが、現在は径40mの後円部のみが残されています。



おおつかじんしゃ

⑫ 大塚神社

社蔵の安永9年（1780）の棟札によれば、斉衡年間（854-857）に土持左衛門尉景綱が宇佐八幡を勧請して創建したと伝えられています。

文永元年（1264）に伊東祐時により再興され、弘治2年（1556）の「土田帳」（予章館文書）には、大塚八幡領として大塚内に田三町二反・修理田三反・釘作田一反・畑四反と屋敷四カ所の記述が見えます。

祭神は、タマヨリヒメノミコトなど3神を祀り、毎年3月頃には豊作を祈願して春神楽20番が奉納され、8月には獅子舞が舞われています。



民俗芸能 大塚神社春神楽

赤江地域の文化遺産 (赤江地域自治区管内)

【地域の歴史と特色】

赤江地域は、東は太平洋に面し、南北を大淀川・清武川の両河川に挟まれた地域で、東部には広大な沖積平野が広がり、西部には宮崎層群で形成された標高30~40mの丘陵が連なっています。

現在の北方・南方・郡司分付近は、古代から中世にかけて、八条女院領国富庄の「国富本郷」に由来し、「本郷」と称されました。また、大淀川河口右岸には中世以来の湊として「赤江湊」があり、当地域の交易の拠点として発展しました。

近世には、恒久村・田吉村・北方村・南方村・郡司村・福島村に分かれ、延岡藩領となった福島村を除く5ヶ村は飢肥藩領となりました。恒久村の枝村であった城ヶ崎町は中世末に開かれた町で、「赤江湊」に隣接していたことから、近世を通じて交易の拠点として栄えました。

【文化遺産マップ】



城ヶ崎地区

じょうがさき

① 城ヶ崎

城ヶ崎は、天文20年（1551）に良港であった大淀川河口の赤江湊に太田七郎左衛門という人物が開いたのが始まりとされています。また、地名の由来は、西にある伊東四十八城の一つ曾井城の前（さき）であることに由来すると言われてい

ます。近世には、城ヶ崎は大淀川上・中流域からの物産の集積地となり、上方との交易で商人の町として発展しました。太田家、南村家、小村家などの豪商の店が並び、商人たちが別当や老名などの町役を勤めました。文久2年（1862）には、商人が藩に願いでて独自に銀札の発行を行うなど、商人による自治も認められました。

また、豊かな大きな経済力を持つようになった城ヶ崎では、商人たちを中心に俳諧などの庶民文化が栄えました。



在りし日の城ヶ崎の様子

じょうがさきはいじんぼひならびにいたびぐん

📷 城ヶ崎俳人墓碑並びに板碑群（市史跡）

城ヶ崎俳壇の発端は、行脚俳人安楽坊春波が、城ヶ崎の豪商である小村西雪（後に日高姓）らを指導し、元文3年（1738）に「俳諧秘伝書」を与えたのがはじまりとされています。その後、京都から来た百井塘雨の指導を受けるなどして、太田可笛、小村五明、南村梅雨らの俳人を輩出しました。

城ヶ崎の俳人たちは、郷土で句会を開いて精進するばかりでなく、町人たちの間で俳諧・文事を盛り立てるなど、その功績は大きく町人文化の発展に寄与しました。

可笛や五明、梅雨など、一時代の町人文化を築いた俳人たちの墓碑は、現在も城ヶ崎の一角にあり、墓碑には句が刻まれているものもあります。また、同じ敷地内には嘉歴3年（1328）銘のものをはじめ、古式の板碑も数基残されています。



やさかじんじゃ

② 八坂神社

八坂神社の創建については詳しくわかりませんが、天保12年（1841）6月5日の神社修築の棟木が残されていることから、それ以前の創建と考えられます。

城ヶ崎が隆盛の時代は、祇園神社と称し、別名牛頭天王八坂神社とも呼ばれて崇敬されていました。明治3年（1870）に夜句茂神社と改称し、社殿の改築を行っていますが、当時恒久神社に合せられ、後に復社となって八坂神社と改称して現在に至っています。



恒久・田吉地区

あかえちょうこふん

③ 赤江町古墳（県史跡）

恒久小学校の南側、少し小高い丘が赤江町古墳で、墳丘の高さ4.7m、径43mの円墳を目にすることができます。昭和8年（1933）の県史跡指定時には3基の古墳がありましたが、現在確認できるのはこの円墳1基のみとなっています。『日向地誌』には「福長院塚」とありますが、かつては側に霧島小祠が祀ってあったため、別名霧島塚とも呼ばれています。

江戸時代に盗掘を受け、剣や鎌、鎧などが出土したと伝えられ、墳丘には石室に使われていたと思われる石材が散乱しています。

昭和50年の区画整理事業により公園として整備され、敷地内には室町から江戸時代にかけての石仏・石塔が置かれています。石仏群の中には、串間円立院による文政3年（1820）作の弘法大師像も含まれています。



ほうせんじのにおうそう

④ 宝泉寺の仁王像

城ヶ崎俳人墓碑並びに板碑群のすぐ西に、真言宗宝泉寺があります。宝泉寺の山門前には、江戸時代に造られた仁王像、阿吽一對が安置されています。

銘には、寛政元年（1789）に延岡藩領古城村（現宮崎市古城）出身の仏師串間円立院により、地元住民が願主となって国家安全、武運長久、火難回避、五穀豊穰を祈願して建立されたことが記されています。

円立院が残した仏像は現在362体が確認できますが、これらに残された銘から宝泉寺の仁王像は、円立院が最も精力的に活動し、大型の仏像彫像をした頃の作であると考えられています。



づんぷりとうでんせつ

⑤ ツンブリ島伝説

大字田吉、一ツ葉大橋南詰の大淀川と八重川に挟まれるあたりに「ズンブリ」という地名が残っています。江戸時代初期のこの辺りは島で、ズンブリ島と呼ばれていました。ズンブリとは宮崎の方言で水を被るという意味です。

かつて、このズンブリ島には、10万両が隠されているという伝説がありました。この伝説は、いつ頃からどのように発祥したのか定かではありませんが、吉村町の清水家に伝わる系図が、この伝説の発端ではないかと考えられています。

昭和31年（1956）の日向日新聞の記事によると、この10万両は宮崎城の隠し財宝とも考えられ、真偽のほどはわかりませんが、宮崎に残るロマンを求めた伝説だといえるでしょう。



そいじょうあと ⑥ 曾井城跡

城ヶ崎の西側、現在野崎病院のある山が曾井城跡です。

『城郭大系』によれば、南側に「本丸」、北側に一段低い「二の丸」があり、発掘調査によって柱穴、土杭等が検出されています。

曾井城は、伊東氏支族の曾井氏によって築かれたとされていますが、曾井氏が伊東氏に背いて島津氏に応じたため、文安元年（1444）に伊東祐堯が城を攻め、領有することとなりました。その後、伊東四十八城の一つに数えられ、城主は八代民部左衛門と伝えられています。伊東氏没落後は、島津氏の家臣、比志島式部大輔義知が入り、天正15年（1587）の豊臣秀吉の九州仕置きによって伊東祐兵の領地となります。元和元年（1615）の一国一城令で青島の紫波洲崎城などとともに廃城となりました。

また、曾井城跡にはかつて古墳があったとされ、中国の貨幣である「貨泉」が出土しています。



しょうはちまんじんじゃのろくじそうとう ⑦ 正八幡神社の六地藏塔幢

曾井城跡の北、諏訪池横の正八幡神社に、加納バイパスの工事に伴って近くから移された六地藏幢2基があります。

この内、永正18年（1521）銘の六地藏幢には「曾井城」と記され、『日向ノ金石文』の編者も、『日向地誌』に曾井城の西麓にあったと記される「瑞雲寺」のものではないかと推定しています。



つねひさじんじゃ ⑧ 恒久神社

恒久神社は、寛治4年（1090）11月15日の創建で、五社大明神を祀る都万宮から勧請され、一ノ宮大明神と称したと伝えられます。

コノハナサクヤヒメの他に4柱の神様が祀られます。

代々、領主領民の崇敬が厚く、社領三百石の寄進があり、社殿の修理、再興造営については、創建以来、文化11年（1814）までの724年間の間に15回にも及んでいます。

明治4年（1871）に村社となった際に恒久神社と改称し、家内安全・子宝・安産・五穀豊穰・厄払いの神様として地元住民から信仰されています。

また、恒久神社には恒久神社夏越の唄という民俗芸能が伝承されています。神社の夏行事として、若者が神輿を担ぎ、赤江浜で海水に浸かって禊払いをする浜下りという行事があり、この時に唄われるのが夏越の唄になります。



民俗芸能 恒久神社夏越の唄

まついようすい

⑨ 松井用水

江戸時代初期、飢肥藩領清武郷のうち東北方・西北方・上南方・下南方・上恒久・中恒久・田吉・岩切の8村は水の乏しい土地柄のため干ばつに苦しむことが多くありました。

このような干ばつから農民を救おうと考えた飢肥藩士の松井五郎兵衛儀長は、満潮時に大淀川が逆流するのを見て清武川の方が水位が高いことに気付き、清武川から水を引くことを考えました。当時としては大事業であったこの事業は、寛永16年（1639）12月に普請にとりかかり、19年間の工事で全長は10 kmにも及びました。この事業によって、農民たちは干ばつから救われただけでなく、新開田を促すものとなりました。

驚くべきは、この事業に着工した時の松井は70歳で、日向国における江戸時代初期の先駆的な開発事業として、この功績は大きく称えられました。

松井用水は、赤江中学校前の用水路など今でもその形を残しています。また、宮崎南警察署の裏手にある稲荷山公園には、松井五郎兵衛を祀った松井神社があります。

松井翁疏水碑



まつざきじ

⑩ 松崎寺

松崎寺は山号を鶴林山といい、寺伝によれば百済の官人日羅の開基と伝えられ、日向七堂伽藍の一つに数えられています。曹洞宗の寺院として飢肥長持寺の末寺に位置付けられ、釈迦如来・観世音菩薩を本尊としています。江戸時代には飢肥藩から禄高五石五斗が給せられるなど伊東家の庇護を受けました。

松崎寺は明治4年（1871）の廃仏毀釈により廃寺となりましたが、明治32年（1899）に曹洞宗帝釈寺の末寺として復寺され現在に至っています。

松崎寺の山門には、飢肥領清武郷今江村（現宮崎市木崎今江）出身の仏師平賀快然作の仁王像が安置されています。

また、境内の墓地には霞流剣士年見与一左衛門の墓があります。与一左衛門は大変な武芸者と伝えられ、威圧で飛んでいたカラス3羽を落としたりという伝説が残されています。



かまたしんしろ

⑪ 鎌田新四郎の墓

松崎の年見家にある「霞之流弟子供養碑」に名前が記されている霞流の高弟、鎌田新四郎の墓が、赤江公民館横の柳籠墓地にあります。

墓碑銘には「霞流師匠、徳翁明功居士、鎌田新四郎、元文三戊午年正月廿一日、弟子二百三十一人」とあり、鎌田新四郎も多く弟子を抱えていたことが分かります。



本郷・郡司分地区

たちとじんじゃ

⑫ 田元神社

空港の西、県道中村木崎線沿いにあります。
田元神社由緒によると、寛治4年(1090)5月、都万神社の祭神を、神託により恒久に分祀するにあたり、まず仮殿を本郷南方に建造したもので、本殿(恒久神社)造営後も田元宮として残ったものです。

境内裏には、大永8年(1528)銘の六地藏幢や串間円立院作の十一面観音立像があります。



かごじんじゃ

⑬ 加護神社

大字郡司分、国富小学校の正門脇にあり、伊東祐邑などを祭神としています。

祐邑は伊東祐堯の二男で、兄祐国とともに飢肥攻めで戦功がありましたが、祐堯・祐国の没後の文明18年(1486)、甥の尹祐の手の者によって日向の日知屋城において殺害されました。

祐邑の死後、伊東家では様々な祟りが起こるようになり、祐邑の霊を鎮めるため、天文5年(1536)に建てられたのが加護神社(加護八幡宮)です。

また、国富小学校の敷地の一角には、曾我兄弟を祀ると伝わる五輪塔があります。



ちょうしょうじ

⑭ 長昌寺の板碑

長昌寺は大字郡司分にあり、山号を繁林山と称する真宗本願寺派の寺院で、境内に鎌倉時代の板碑残欠2基があります。

一つは、紀年不詳ではありますが、造立は鎌倉時代後期とみられ、碑文には「瑜祇経」の一部を薬研彫りにしています。もう一つには、元亨3年(1323)の紀年銘があり、死者の霊魂をあらわす「幽霊」という文字が使われています。いずれも、市内に遺された数少ない鎌倉時代の板碑として貴重であり、歴史、宗教史、文化史の面からも重要な資料といえます。



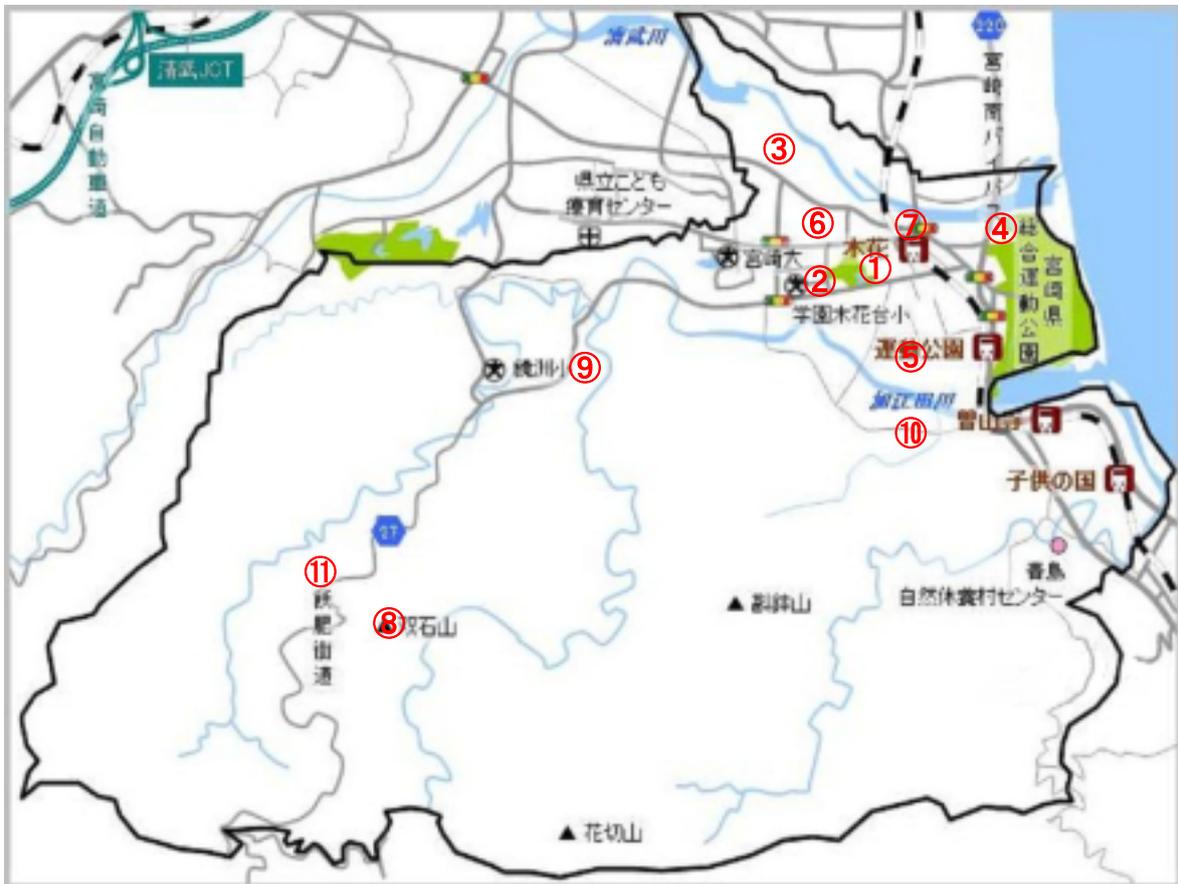
木花地域の文化遺産 (木花地域自治区管内)

【地域の歴史と特色】

建久8年（1197）作成の「日向図田帳」に、「隈野八十丁」「鏡淵六十丁」と記されています。古代～中世にかけての木花地域一帯は、八条女院（鳥羽天皇の第3皇女）領国富庄（くどみのしょう）の一部に含まれ、南北朝期の永和4年（1378）頃には、伊東惣領家の祐重・祐安の所領となっていました（『日向記』）。

近世には、隈野村・鏡洲村・加江田村として飢肥藩領となりましたが、寛文2年（1662）の大地震（いわゆる外所地震）によって、高2,525石余（隈野村533石余、加江田村1,460石余）が海没し、木花地域の様相も大きく変わりました。

【文化遺産マップ】



きばなじんじゃ

① 木花神社

標高40m程の木花ヶ丘の南端に、ニニギノミコトとコノハナサクヤヒメの夫婦神を祀る木花神社があります。

創建は不詳ですが、永禄5年（1562）に伊東義祐が記した『飢肥紀行』の中に木花神社のことが記されていることから、その頃にはすでに祀られていたと考えられます。

別名「木花の権現さま」とも呼ばれ、神社内に残る宝暦5年（1755）の棟札には、「開耶姫（さくやひめ）大権現」と記されています。

社殿内に5枚残る何れの棟札にも歴代飢肥藩主の武運長久の願文が記されていることから、飢肥藩主に対する地域住民の崇敬の厚さがうかがえます。



もくそうあみだによらいりつそういっく

📷 木造阿弥陀如来立像一軀（市有形文化財）

木花神社境内の西隣には、木花山法満寺がありました。現在は、その名残を偲ぶ石塔群とともに木造阿弥陀如来立像一軀を安置する仏堂だけが残されています。

本像は、像高99.0cm、螺髪（らはつ）に衲衣（のうえ）を纏い、蓮華座に立って来迎印を結んでいます。

複数の木を組み合わせる寄木造りで作られ、漆の上から金箔を貼り付ける漆箔（しっばく）、目には水晶体をはめ込む玉眼（ぎょくがん）といった技法が使われています。

これらは、東大寺南大門の仁王像を作った鎌倉時代初期の仏師快慶の作風に習ったもので、いわゆる安阿弥陀様の弥陀立像の一例です。

衣褶（いしゅう）がやや形式的に流れる特徴から鎌倉時代中期以降の造立と考えられ、県下に数少ない鎌倉彫刻の一例として貴重なものといえます。



れいせんさくらがわとしそうぼさつりつそう

📷 霊泉桜川と地藏菩薩立像

木花神社の参道階段脇に霊泉桜川があります。

この泉は、邇邇芸命と木花佐久夜毘売が出会ったとの言い伝えが残る場所として知られ、民話「桜子物語」の舞台にも登場します。

この泉の南側の一角に、古城村（現宮崎市古城）出身の仏師串間円立院作の地藏菩薩立像があります。

円立院は、真言宗護東寺の住職で、修験者として峰入り修行などを行い、修行の一環として数多くの石像を制作しました。

円立院が残した石像は、宮崎市内を中心に、現在362体が確認できますが、この地藏菩薩も修行の一環として彫られたものと考えられています。



かえだじんじゃ
② 加江田神社

祭神はアマテラスオオミカミ・イザナギノミコト・イザナミノミコトで、古くは伊勢神明宮・天照皇大神宮と称しました。

弘治2年（1556）の「土田帳」（予章館文書）には、加江田伊勢領の代官寄進所として、「加江田上分」「同所下分」などに合わせて屋敷2ヶ所と1町9段半の田地が社領として記されています。

「上井覚兼日記」によれば、宮崎地頭上井覚兼も度々同社を訪れており、天正11年（1583）5月21日には、肥前島原で疫病が流行したため、覚兼は部下の病除けのため伊勢で奉射千矢の立願をしています。

元の社殿は加江田の元伊勢にありましたが、寛文2年（1662）の大地震（外所地震）によって海中に没したため、翌年現在の地に遷座されました。

江戸時代には飢肥藩主の崇敬厚く、神殿・祭具等には伊東家の紋が彫られ、毎年2、6、9月の例祭には藩主自ら参拝しました。



きばなそんこふん
③ 木花村古墳（県史跡）

清武川と県道338号線に挟まれた畑中に、前方後円墳2基（1号墳と2号墳）と円墳1基（4号墳）が現存します。

1号墳は墳長58m、葺石はありますが埴輪は確認されていません。『木花郷土史』によれば、昭和の初期、後円部とくびれ部の境から石棺が発見され、鉄刀が出土したとあり、近年、後円部で片面に赤色顔料を塗布した板石が確認されていることから、石棺は板石組合せの箱形構造と考えられます。

2号墳は、墳丘の改変が著しく、詳細は不明ですが、現状では墳長43mを測り、葺石と円筒埴輪が認められます。



とんところおおじしんくようひ
④ 外所大地震供養碑

寛文2年（1662）9月19日に起きた日向国最大の地震（マグニチュード7.8）は、有史以来例のない大地震として伝えられています。

その惨状はすさまじく、この時海寄りにあった外所村が海中に沈みました。また、『日向纂記』によれば、飢肥城（現日南市）の石垣9箇所が崩れ、堀が2箇所埋まるなど、古今未曾有の大災と記されています。

寛文の大地震は、海中に沈んだ外所村に因んで「外所地震」とも呼ばれています。国道220号線沿いの島山では、およそ50年毎に供養碑が建てられ、当時被災した人々の供養が行われています。



しょうれんじつみ
⑤ 正蓮寺堤

外所地震によって、木花ヶ丘麓の正蓮寺平野は入海となってしまいました。

その後、入江の海は洪水の度に土砂に埋まり、しだいに泥沼となってきました。そのため、享保年間（1716-36）に島として残っていた島山を基点として、外海と区画する堤防が築かれました。これを正蓮寺内堤といいます。さらに、100年後の文政年間（1818-30）に、その外側に築かれた堤防を正蓮寺外堤と呼びます。

内堤の完成には19年、外堤は11年と長い歳月がかかりましたが、この2度にわたる大工事によって、正蓮寺平野は外所地震で失われた水田地帯を取り戻しました。

現在、「正蓮寺」「新正蓮寺」「外新正蓮寺」の地名が残っています。



現在の正蓮寺平野

くまのじんじゃ
⑥ 熊野神社

社伝によれば、弘文天皇（大友皇子のこと、即位したかどうかは不明）の頃（約1,340年前）、紀伊国の熊野神社のご神霊を勧請したのが創建で、この熊野神社に由来して熊野の地名が起ったと伝えられています。

江戸時代までは、山王大権現と称し、藩政時代は、加江田神社と並んで旧清武郷五社宮の一つとされていました。飢肥藩主の崇敬厚く、社領は3石7斗で、大祭日には藩主が必ず参拝したと伝えられます。

明治維新の際に熊野神社と称し、明治25年（1892）に西の原より現在地に遷座しました。

熊野神社の祭礼で舞われ、祭りを盛り上げた踊りに木花相撲踊りがあります。由来について詳しい記録は残されていませんが、江戸末期頃、宮崎に地方巡業に訪れた大相撲一行から離れた3人の力士が木花地区の農家に住み着くようになり、この3人が踊って見せたものを女子に教え込んだのが始まりだと伝えられています。

相撲の形を取り入れた踊りを、小唄風に歌われる相撲甚句に合わせて踊るもので、現在は木花小学校の児童たちによる同好会が設立され、大人から子どもまで幅広い世代で伝承活動に取り組んでいます。



民俗芸能 木花相撲踊り(市無形民俗文化財)



さいきょうじ

⑦ 西教寺

外所山西教寺と称し、浄土真宗本願寺派に属します。

慶長元年（1596）、道源法師によって外所村に創建されますが、寛文2年（1662）の外所地震によって海中に水没しました。その後一度今江に移った後、天和元年（1681）に現在地の熊野に再建されました。島山の外所地震の供養碑の横には、道源法師の墓が残されています。

西教寺2代目住職の道和法師（のちに刀工として和泉守国貞を名乗る）の二男、井上真改は新刀の五大名工の一人と呼ばれた人物で、京都の藤原国壽に鍛刀を学びました。初め和泉守国貞（2代目国貞）を名乗りますが、熊沢蕃山の勧めにより真改と改めました。

真改は、一刀を鍛える度に百鍛して後に心になわぬものは之を投げ捨てたといわれ、鍛錬した刀身の地鉄が麗しく、銚（にえ）のよさ、刃の上のすずしさ、彫物の手際、銘の手蹟は五大名工の中でも抜きん出ていたと言われています。

その作刀の素晴らしさは、寛文元年（1661）、朝廷に作品を献じた際、賞賛を受けて十六葉菊花紋を入れること許されたほどで、後に新刀正宗又は大坂正宗と世の人々にうたわれました。



井上真改作「籠つる瓶」
（宮崎市安井息軒記念館蔵）

ぼろいしやま

⑧ 双石山（国天然記念物）

木花西北部にある双石山は、海拔509m、中腹から頂上まで砂岩や礫岩でできている急峻な山で、長年の浸食によって様々な奇岩や絶壁が見られます。

全域が常緑広葉樹林として覆われており、構成種は113科570種が記録されています。特にシダ類が豊富で、南方系シダ類の宝庫と呼ばれる一方、南限植物も自生しています。また、林内には1属1種の哺乳動物として貴重なヤマネや亜熱帯系のミカドアゲハなどが生息しているなど、自然が多く残されている大変貴重な場所になっています。



うばがたけじんじゃ

📷 姥ヶ嶽神社

平（びら）の権現さまとも称し、姥ヶ谷から登ること300mにある鏡洲九平の森厳な山中に鎮座しています。創建は不明ですが、一説には500～600年以前から祀られていると伝えられています。

祭神は、建御雷命（たけみかずちのみこと）など5神で、戦前には出征兵士の武運長久の祈願がなされました。

まるのじんじゃ

⑨ 丸野神社

加江田溪谷への入り口、鏡洲丸野にあります。
先祖代々この神社を祀る川添家によれば、以前は伊豆で伊東氏に仕えていましたが、伊東氏の日向下向に従ってこの地に移り住んだ際、開拓・五穀・国土経営の神である大国主命（おおくにぬしのみこと）を祀ったと伝えられています。
江戸時代には、飢肥藩主から社禄を給せられ、社殿の向拝柱には雲龍の彫刻が施されています。



えんなんじ

⑩ 円南寺

飢肥の曹洞宗長持寺の末寺で、創建は不明ですが、かつては日向七堂伽藍の一つに数えられ、安産の観音様として知られていました。
江戸時代は、飢肥藩主から寺禄18石を給され、崇敬を厚く受けていましたが、明治5年（1872）に廃仏毀釈によって廃寺となりました。明治14年（1881）に復寺後は、宮崎市の帝釈寺の末寺となっています。
堂内には、天正10年（1582）に少年使節としてヨーロッパに渡った伊東満所と伊東家累代の位牌が安置されています。また、円南寺の山門と境内には仏師串間円立院の作とみられる仁王像と地藏菩薩坐像があります。



おびかいどう

⑪ 飢肥街道

飢肥街道とは、飢肥城から清武城を結ぶ山仮屋越えの街道のことです（佐土原まで含める説もあります）。平部嶺南の『日向地誌』においては、木原村では飢肥街道と称し、鏡洲村では志布志街道と称しています。
現在の県道宮崎北郷線は明治以降に開削されたもので、飢肥街道とは場所によって大きく離れますが、飢肥城下から山仮屋、椿山峠、九平、塩鶴を通り、瀬田峠をぬけて木原に至ります。
九平を過ぎて1km下った道路脇に道標があり、「清武へ壱里三拾四町四拾六間」と記されています。

青島・折生迫地区

あおしま ① 青島

日南海岸国定公園の最北端に位置する低平な小島で、周囲約1.5km、面積約4.4ha、最大標高は5.7mで、波蝕台の上に堆積してできた貝殻泥砂によってできています。

古くは「淡島（あわしま）」「齒染の浮島（しだのうきしま）」「鴨就島（かもつくしま）」とも呼ばれ、山幸彦・海幸彦の神話伝説の舞台として知られています。

今では陸続きの半島のようにっていますが、かつては沖に浮かぶ小島でした。『日向記』によれば、天文年間（1532-55）に伊東義祐が飢肥へ遠征した際「薄霧ノタエマヲ見レハ秋風ニ残ル梢ヤ青島ノ松」と詠んで、磯伝いに進んだと記されています。また、『上井覚兼日記』の天正13年（1585）6月11日条には、上井覚兼・鎌田兼政らが船で青島に行き、水練などをして遊んだことが記されています。



あおしまあねったいせいしょくぶつぐんらく 📷 青島亜熱帯性植物群落（国特別天然記念物）

島内は28種類の亜熱帯性植物で覆われ、特に群落の80%を占めるビロウ群落は、世界で最も北にあるビロウの純林として、とても名高いものとなっています。



あおしまのりゅうきかいしょうときけいはしょくこん 📷 青島の隆起海床と奇形波蝕痕（国天然記念物）

通称「鬼の洗濯板」と呼ばれる青島の地層は、砂岩と泥岩の累層が隆起しながら傾斜して平坦化したものと考えられています。また、亀甲状の亀裂は形成時の乾燥によるもの、無数の甌穴は穿孔貝によるものと考えられています。



あおしまじんしゃ
青島神社

青島神社は、青島の中央にあり、アマツヒダカヒコホホデミノミコト・シオヅツノオオカミ・トヨタマヒメノミコトを祭神として祀っています。

創建は不詳ですが、文明13年（1481）に伊東祐堯が所堂3斗5升蒔・所田3斗5升蒔の計7斗蒔を寄進したと伝え、文亀3年（1503）のものなど棟札9枚が残されています。

古くは「青島大明神」「鴨就青島宮」とも称し、明治維新の際に青島神社と改称されました。

江戸時代には飢肥藩主の崇敬厚く、霊域であったため、島奉行を置いて島中及びその近辺を監視させ、島への牛馬の渡島や発砲を厳禁するなど、一切の汚穢を警戒しました。

7月下旬に執行される祭礼は「海を渡る祭礼」と呼ばれています。祭りの中心は、神輿が対岸の折生迫に渡御し、天神社に仮泊する浜下りで、以前は22歳の若者たちによって奉仕されていました。



民俗芸能 海を渡る祭礼浜下り唄

まつぞえかいづか
② 松添貝塚

青島海岸の西、標高6m前後の沖積地に松添貝塚があります。縄文時代後期から晩期にかけて（紀元前150年頃）の大規模な貝塚で、昭和28年・同42年の発掘調査では、サザエやハマグリ等の貝類を始め、鳥獣類や魚類の骨、くじらの骨、土器・石器等が出土しています。



あおしまむらこふん
③ 青島村古墳（県史跡）

青島歴史文化の広場公園の一角とその東の小高い丘には、古墳時代後期のものと推定される青島村古墳があります。青島村古墳として、円墳5基が県の文化財指定を受けていますが、現在確認できる2基についても、ほとんど墳丘の形をとどめていません。



しわざきじょうあと
④ 紫波州崎城跡

紫波州崎城は、青島の南、海岸に突き出した城山（じょうやま）の山頂にあり、東は日向灘に面し、西は突浪川が流れる要害の地でした。

『日向記』によれば、文安元年（1444）の城主は長井式部少輔であったが、伊東祐堯が当城の明け渡しを望んだため開城し、後に川崎五郎左衛門良正が地頭に任じられています。

島津領となってからは、宮崎地頭上井覚兼の父 薫兼が城主となり、覚兼も度々当城を訪れています。

元和元年（1615）、伊東祐慶のときに廃城、現在は、本丸跡に仏舎利塔が建ち、空堀等の遺構が残されています。



ほりきりとうげ
⑤ 堀切峠

鰐塚山地から日南海岸へ抜けると、海拔150m程の切り通し道路の眼下に、広大な太平洋の眺望が開けてきます。

堀切峠は、大正年間に開通し、当時の宮崎市と内海をつなぐ主要交通路となりました。

道路脇には、フェニックスを始めとする亜熱帯性の植物が並び、宮崎ならではの南国イメージを呈し、宮崎を代表する観光名所となっています。



うどかいどう
⑥ 鵜戸街道

宮崎市中村町から城ヶ崎、赤江、本郷南方、郡司分、熊野、折生迫と海岸沿いに南下する鵜戸までの十一里十二町（約45km）と、飢肥城下から鳥居峠を越えて鵜戸にいたる三里八町（約13km）の道筋を鵜戸街道といい、江戸時代には鵜戸神宮往還と呼ばれていました。

現在その名残りはほとんど見ることはできませんが、曾山寺から折生迫にいたる国道220号線や青島中学校付近から南に向かう峠道が鵜戸街道といわれています。



けいびんてつどうあと

⑦ 軽便鉄道跡

明治時代、大型汽船が登場し、河口港である赤江港への寄航が不可能になると、新たな寄港地として内海港が着目されるようになりました。このため、明治44年（1911）に宮崎軽便鉄道株式会社が設立され、大正2年（1913）には赤江と内海を結ぶ軽便鉄道が運行を開始しました。

軽便鉄道は内海地区に繁栄をもたらすだけでなく、日豊本線の全線開通に先立って開通したこともあって人々の暮らしの改善に大きく貢献しました。

その後、会社は昭和18年（1943）に宮崎交通株式会社に吸収され、さらに、日南線鉄道敷設工事の進展に伴い、昭和37年（1962）に国鉄に買収され、その歴史に終止符を打つことになりました。



ひのみさきかんのんじ

⑧ 日之御崎観音寺

白浜海岸の南、御崎と称される岬の北西麓に日之御崎観音寺があります。開山の年月は不詳ですが、古くは真言宗で御崎寺と称し、推古天皇の時代に百濟の僧日羅上人が開いたと伝えられ、往古よりの名刹として日向七堂伽藍の一つに数えられています。

『日向記』によれば、永禄10年（1567）島津忠良が伊東義祐に真幸口（現えびの市）での合戦の和談を申し入れるため、坊津（現鹿児島県加世田市）の一乗院を使僧として遣わし、御崎寺に着船したと伝えられています。

江戸時代の寺領は22石6斗、明治5年（1872）に廃寺となりましたが、その後、曹洞宗の雲海山日之御崎観音寺として再興されました。



あかうみがめおよびそのさんらんち

⑨ アカウミガメ及びその産卵地（県天然記念物）

アカウミガメは、ウミガメの一種で甲長65～100cm程、甲羅の色が赤褐色であることからそのように呼ばれています。太平洋、大西洋、インド洋、地中海に広く分布し、そのうち太平洋を回遊する個体群が毎年5月から8月にかけて本州中部以南の海岸に産卵のため上陸します。

その中でも宮崎市の海岸は全国でも有数の上陸数を誇り、市街地のすぐそばで大型の野生動物が確認できる、とても貴重な場所となっています。



あおしまうすだいこおどり
〈民俗芸能〉 青島臼太鼓踊り（県無形民俗文化財）

青島臼太鼓踊りは、飢肥藩主伊東祐兵が豊臣秀吉の朝鮮出兵に従軍した際、敵の包囲網を突破するために敵を脅し、味方を鼓舞するため踊ったのが始まりと伝えられています。

宝永4年（1707）、飢肥藩から盆踊りとして公許されると、青島臼太鼓踊りと呼ばれ伝承されるようになりました。

鬼面と赤白青の紙で彩った蓑を付け、歌・太鼓・鉦の音にあわせて円形に廻りながら踊ります。



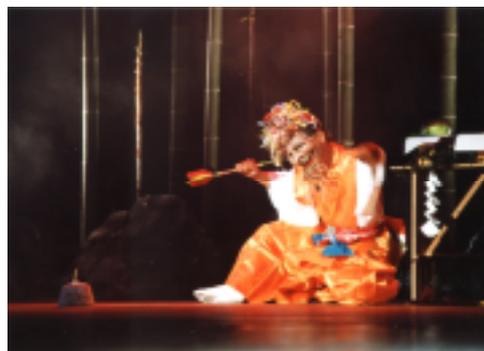
内海地区

のしまじんじゃ
⑩ 野島神社

野島神社は、古くは白鬚大明神と呼ばれ、明治5年（1872）に年ノ神社と大將軍社を合祀した際に野島神社と改称しました。

塩筒大神（しおづつのおおかみ）、猿田彦神（さるとひこのかみ）他3神を祭神として祀り、社蔵の棟札には、文安3年（1446）に創建し、貞享2年（1685）、明和6年（1769）に社殿の再建を行ったことが記されています。また、『上井覚兼日記』には、天正13年（1585）11月15日に伊比井社参詣の帰りに野島白鬚大明神大宮司宅に宿泊し、翌日同社を参詣していることが記されています。

当社には創祀を物語る縁起が残されており、これが『浦島子伝』『扶桑略記』と結びつき、「浦島太郎伝説」として今に語り継がれています。



民俗芸能 野島神楽(市無形民俗文化財) ➡

うちうみのあこう
📷 内海のアコウ（国天然記念物）

野島神社の境内には、国指定の天然記念物であるアコウが3株あります。

アコウは和歌山県を北限とする亜熱帯性のクワ科の高木で、多数の気根を出し、中には幹のように太く成長するものもあります。

社殿の東山斜面にあるアコウは、南東方向に約40m、南西方向に20mと特に枝の広がり大きいことで有名です。



うちうみのやっこそうはっせいち

⑪ 内海のヤッコソウ発生地（国特別天然記念物）

国道220号線の西側、人家の裏山にヤッコソウの発生地があります。

ヤッコソウは四国・九州の南部及び沖縄に分布する珍種で、スダジイの木に寄生し、10月から11月にかけて発生します。名前の由来は、鱗片状の葉を広げたその姿が江戸時代の奴さんに似ていたことから付けられました。

内海のヤッコソウは、明治42年（1909）に発見され、それ以来、発生固体数の多さと規模の大きさが注目されていましたが、平成5年の台風で寄生木のスダジイが倒木し、平成17年から発生が見られなくなりました。



うちうみあまごいたいこ

〈民俗芸能〉 内海雨乞い太鼓

昭和2年（1926）頃に木花・木崎地区より伝えられた内海雨乞い太鼓は、田植えや稲を育てる時期の雨が少ないときに、五穀豊穰と雨が降るように祈って演奏されていました。

昭和30年頃には一度途絶えてしまいましたが、平成11年に地区の人たちの手によって復活し、現在では郷土の芸能として内海小学校の子どもたちに受け継がれています。



もりやまじんじやなつまつりいわいうた

〈民俗芸能〉 守山神社夏祭り唄

港町である内海では、大正年間から海上安全と豊漁を祈願して、毎年地区総出の夏祭りが行われるようになりました。

祭りでは、内海の産土神を祀る守山神社で神事が行われた後、あばれ神輿が町を練り歩きます。あばれ神輿の振り付けとなるこの祝唄は、港町ならではの明るくめでたい歌詞で、男性的でこぶしのきいた唄となっています。祝唄の原形となった神輿と唄は、江戸時代に所属した加江田村から伝わったと言われています。



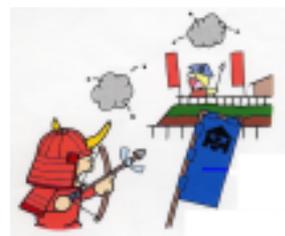
うちうみとうげじょう

⑫ 内海峠城

内海に向かう古道の峠の西方に、応永30年（1423）に伊東祐立が築いたと伝えられる内海峠城があります。

内海峠城は、南方に対する防御線を成し、文明年間（1469-87）頃まで、島津氏との攻防が繰り返された地です。

標高175mの山頂付近に平坦地が残っています。



はすがいけよこあなぐん

① 蓮ヶ池横穴群（国史跡）

宮崎平野の西辺の入り組んだ谷間の斜面に、現在82基の横穴が確認されています。

横穴には、盗掘や第二次大戦中に軍用に使用されたために加工を受けたものもありますが、玄室の基本形態は寄棟造の妻入りで、構築時の工具痕が美しく残っています。また、53号横穴では、玄室壁面に線刻壁画を見ることができます。

出土遺物には、須恵器の坏・高坏・甕片・土師器などの土器、鉄鏃・刀子などの武具・馬具類、勾玉・金環などの装身具などがあり、これらの遺物から横穴群が造られたのは6世紀中葉から7世紀にかけてと考えられています。



にいなづめはちまんじんじゃ

② 新名爪八幡神社

現在の新名爪・芳土を中心とする一帯は、豊前宇佐八幡宮の荘園、新名爪別府に比定される地域で、新名爪八幡神社は、その地域の鎮守として祀られました。土持景綱が地頭のとときに勧請したと伝えられ、古くは「土持八幡」と呼ばれていました。

神社に伝わる古文書に、天文年間（1532-55）の神事日記が伝わり、「御かくら（神楽）三日御座候」など、当時の神事の様子が記されています。この神楽は今に伝わり、元々33番あった演目のうち、6番を伝承し、毎年春と秋の社日に奉納しています。

また、社宝として、九州に3面（他に福岡県太宰府の観世音寺、大分県宇佐八幡宮）しか残っていないという木造の舞楽面陵王が伝えられています。縦30cm、横18cm、鼻の高さ13.5cmで、室町時代の作とされています。神社の氏子中では、「不老面」と呼ばれ、権威ある面として厚い崇敬を受けています。



舞楽面陵王（市有形文化財）

たんごじょうあと
③ 丹後城跡

丹後城跡は、蓮ヶ池横穴群の北側丘陵に位置します。『日向地誌』によれば、丹後山の東南端にあり、古くは三須丹後守という者の居城と伝えられ、永徳年間（1381-84、北朝年号）の土持氏家臣、三須石見守時信と同族ではないかと記されています。

標高65mの頂部付近に主郭と見られる平坦地があり、その東側に比較的明瞭な堀切を確認することができます。

ひろはらじんじゃ
④ 広原神社

江戸時代までは山王権現と称し、元の社は、現在地の西方約500mの字宮ノ下（通称鳥の迫）にありました。元来、広原地区の人々は、島之内の八幡社を祀っていましたが、元禄3年（1690）に島之内島津氏3千石が分知されると、極楽寺の山王社と神向の阿蘇社を合わせて、新たに平大明神と称する社を建立しました。その後、明治45年（1912）に現在地へ遷宮されるまでの約200年間は、春秋の社日の例祭をこの社で執り行いました。

現在、社日の例祭で奉納された神楽は、広原神楽として伝えられています。33番の番付の中には、アメノウズメノミコト扮する「中の手」やヤマタノオロチ伝説に因んだ「蛇切り」といった演目も見られ、岩戸系や出雲系神楽など、様々な神楽の要素が含まれています。

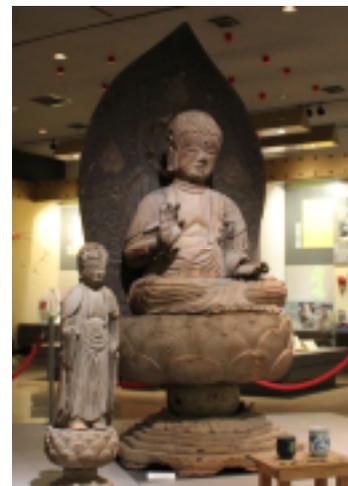


民俗芸能 広原神楽 ➡

こくらくじあと
⑤ 極楽寺跡

大字広原山王迫に慈光山極楽寺の跡があります。跡地の北東150mの場所には、五輪塔など数10基の墓碑が残されています。鎌倉時代の創建といわれ、鎌倉末期から南北朝期にかけて、慶覚法師の代に釈迦堂を建て、尊像を安置したと伝えられています。

現在、本尊の木造釈迦如来像などは地区の公民館に保管されています。



木造釈迦如来像 ➡

もくそうじゅういちめんかんのりつそう

⑥ 木造十一面観音立像（市有形文化財）

畑公民館には、鎌倉時代末期から南北朝時代にかけて制作されたとされる木造十一面観音立像一軀が伝えられています。蓮華座に立つ190cmの一木造りの像で、髻長に仏面、外頭上面の二段に十一面をもち、垂髪を両肩に垂し、左手に宝瓶を取り、右手に錫杖を握っています。また、衣文の彫り口の深い刀技、あるいは蓮弁の形成等に鎌倉時代後期の特色が見られます。



うきはし（びたびたばしこせんじょう）

⑦ 浮橋（浸々橋古戦場）

「浸々橋」は、佐土原城下那珂と大字広原との境となる石崎川に架けられた橋のことで、現在その地には有喜橋（うきはし）が架かっています。

『日向地誌』によれば、「浸々橋」とは浮橋のことで、戦国時代に要害とするため、わざと橋を水面に浮かべ、兩岸の樹枝から鉄鎖でつなぎ、事ある時ははずせるようにしたと記されています。

慶長5年（1600）の伊東氏家臣稲津掃部助の宮崎城攻めの際には、この浸々橋付近で稲津勢と佐土原城より打って出た島津勢の間で戦闘が行われました。



すみよしそんこふん

⑧ 住吉村古墳（県史跡）

昭和14年（1939）と昭和19年に、芳土・島之内・広原一帯に分布する古墳・横穴群は、住吉村古墳として県史跡に指定されました（当初は国史跡となった蓮ヶ池横穴群も含んでいました）。前方後円墳2基、円墳2基、横穴63基が指定を受けていますが、現在は島之内の前方後円墳1基と芳土・広原地区の横穴40基が確認できます。

全長67mの前方後円墳である1号墳からは、円筒埴輪が採集されています。



ひろはらよこあなだいいちごう

⑨ 広原横穴第1号（市史跡）

広原の麓共同墓地の北斜面には、住吉村古墳として県史跡に指定されている横穴7基があります。広原横穴第1号は、この指定地の東側の隣接地で昭和52年に新たに発見されました。

玄室は、主軸の長さ250cm、幅205cmで、横断面はドーム状を呈しています。

この横穴の玄室の側壁には、線刻壁画が描かれています。東側壁に9体の人物像、西側壁に2体の人物像などが描かれています。壁画の構成に、葬列を推測させるような特異性が見受けられ、死後の儀礼に関して様々な研究課題を提示しています。



しまのうちはちまんじんじゃ

⑩ 島之内八幡神社

宇佐八幡宮領広原荘の鎮守として勧請されたと伝えられ、当初は広原八幡と称しました。

弘治2年（1556）の「土田帳」（予章館文書）によれば、八幡大宮司分として広原60町のうち田数2町3段・手水屋1ヶ所などが記され、広原荘の多くの土地が社領となっていたことがわかります。

慶長5年（1600）の伊東氏と島津氏の戦闘で戦火に逢い、社殿・宝物ことごとく焼失し、また、寛文2年（1662）の外所地震でも被災し、翌4年に再興したといわれています。

春・秋の社日に奉納される神楽については、その番付と神歌・唱教などが記された『神事縁起書』が残されており、その由来と内容を知ることができます。

民俗芸能 島之内八幡神社神楽



たいおうぜんじ

⑪ 泰翁禅寺

島津家15代当主、島津勝久（?-1573?）が伊東氏を攻めた際、戦没者供養のために一寺を建立し、その仏号（大翁妙蓮禅定門）を寺号としたと伝えられていますが、その真偽は詳らかではありません。京都東福寺乾峰土曇の法脈で、初代住職には喜山土慶が招かれましたが、江戸時代中期からは妙心寺派となりました。

元禄3年（1690）、島之内島津氏に3千石が分知されると、領内の菩提寺として位置づけられました。



⑫ 住吉神社

大阪市住吉区の住吉大社、福岡市東区の志賀海神社とともに住吉三社として有名です。寛政5年（1793）の『住吉大明神縁起』では孝安天皇（『古事記』『日本書紀』に第6代と伝える天皇）時代の創建と記されています。

祭神の三神（ウワツツオノカミ、ナカツツオノカミ、ソコツツオノカミ）は、イザナギノミコトが黄泉国から逃げ帰り、阿波岐原で裸ぎ祓うことで出現した神といわれ、『日向記』には「アワキカ原ノ波間ヨリ顕レ出シ住吉ノ神、住吉ノ里モチカウ見ヘワタリ」と記されています。

例祭日に売られる弾き猿は、かつては疱瘡除けのお守りでしたが、現在は開運・無病息災のお守りとして親しまれています。



生目地域の文化遺産 (生目地域自治区管内)

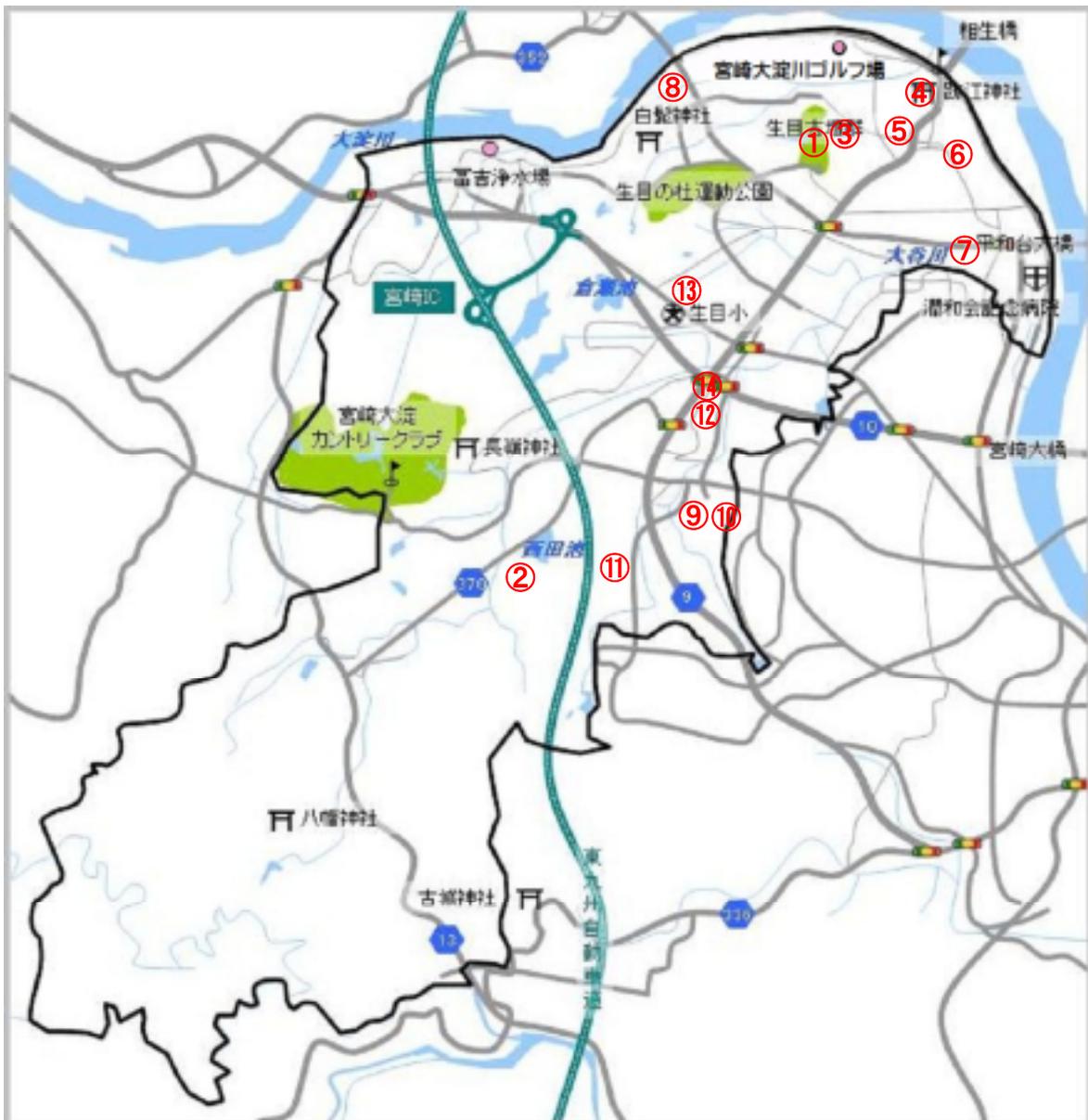
【地域の歴史と特色】

生目地域は、大淀川の右岸に位置し、北東部の標高20m前後の丘陵上には、国史跡に指定されている生目古墳群があります。

古代には、宇佐八幡宮の荘園であった浮田庄として開発され、鎌倉時代末期には、庄内に「生目方」「跡江方」「小松方」の名が見えます。南北朝期には、浮田庄も争乱に巻き込まれ、跡江や高浮田で合戦が行われました。

江戸時代には、生目村・浮田村・小松村・跡江村に分かれ、幕府領となった一時期を除き、延岡藩が領する地域となりました。

【文化遺産マップ】



いきめこふんぐん

① 生目古墳群（国史跡）

生目古墳群は、昭和18年（1943）に前方後円墳7基と円墳36基の合計43基が指定を受けています。

中でも古墳時代前期の長さが100mを超える前方後円墳3基（1号墳、3号墳）は、同時期の九州の首長墓でも突出した存在であり、強力な力を持った豪族がこの時期、大淀川下流域にいたことを示しています。

近年の発掘調査では、前方後円墳に伴う地下式横穴墓等が発見され、南九州の古墳時代の墓制を研究するうえで重要な事例となっています。

平成20年には、生目古墳群史跡公園として整備され、隣接する生目の杜遊古館では、生目古墳群や市内の遺跡から発掘された土器等の出土遺物が展示されるなど、市内の遺跡について学ぶことができます。



いきめそんこふん

② 生目村古墳（県史跡）

県指定の生目村古墳は昭和19年には指定を受けており、現在、細江に円墳が2基、浮田と富吉に横穴13基が確認できます。

昭和42年（1967）には未指定の横穴が生目地域センター北側の丘陵で発見され、故石川恒太郎氏らによって調査されています。この時の調査では、直刀や鉄鏃、須恵器の高坏などが出土し、6世紀中頃から後半に築造されたと考えられていますが、宅地造成によって現在は消滅しています。



あとえかいづか

③ 跡江貝塚

跡江貝塚は、生目古墳群の東麓に所在する縄文時代早前期の貝塚で、昭和39年から同45年にかけて数回にわたり発掘調査が行われました。上層はハイガイを主として厚さ約20cm、下層はシジミを主として厚さ約50cmほど堆積し、貝類のほか獣骨・人骨・土器・石器などの遺物が出土しました。現在、その痕跡はほとんど残されていませんが、当時の海岸線を知る上で貴重な遺跡とされています。

あとえじんじゃ
④ 跡江神社

伊勢の豊受皇大神を祀り、古くは神明宮と称しました。社伝によれば、寛元4年(1246)の創建で、その後、天文16年(1547)に再興され、神社所蔵の棟札には、大檀那に伊東義祐の名が記されています。

江戸時代には、延岡藩の庇護を受け、寛永11年(1634)の棟札に大檀那として延岡藩主有馬康純の名が記されています。明治初年には跡江神社と改称し、村社に列せられました。

豊年踊りは、旧暦8月7・8日の2日間、五穀豊穰を祈願して、地区内の各神社や希望する個人宅などで踊られる祈祷踊りです。

また、三拍子(さんべし)踊りは、老若男女の別なく地区民総参加で、顔を隠して変装し、男性が女性に扮装するなどして、夜を徹して賑やかに踊る芸能です。豊年踊りが昼間に踊られるのに対して、三拍子踊りは夜の部の踊りとして親しまれています。

これらの踊りは、戦時中に途絶えていましたが、昭和55年(1980)に保存会が結成され、現在も伝承されています。

民俗芸能 三拍子踊り・豊年踊り ➡



はんぴどんのはか
⑤ 半平どんの墓

半平どんは、民話の中に登場するとんち者で、「ゴゴの酒」「つくらん魚」「邪魔なスリバチ山」など、彼にまつわる民話は数多く残されています。

半平どんは、話の中でつくりあげられた人物といわれていますが、跡江の公園墓地内にその墓が存在しています。墓には「月潤自光居士」「俗名半平」「天明五乙巳年(1785)八月七日」と刻まれており、近くにはその妻と息子の墓も立ち並んでいます。

半平どんとその家族の墓は、元は跡江共同墓地にあり、妻の墓は半平どんの墓より二間(約3.6m)位後方に建てられていました。一説には、生前は夫婦喧嘩が絶えず、「墓を並べて建てちよくと、死んでからも夫婦喧嘩せんならん。嬢(かかあ)の墓は離して建ててくれ」という、半平どんの遺言によったとも伝えられています。



大小の盃

ある日、半平どんは、下北の代官所から呼び出され、何か面白い話をせよと注文せられました。すると半平どん曰く、「私は、今朝、ここに来る途中、道ばたに一疋の小蛇が大きな蛙を呑もうとしちよるのを見ましたので、蛇よ、放せ放せと申しましたら、小蛇は呑まにゃ放さん放さんと言いやした」。

代官は笑って酒を出しましたが、渡された小さな盃を見て、半平どんがシクシクと泣き出しました。怪しんで訳を訊くと、半平どん、「私の親爺も酒好きじやんしたが、小さい盃を喉にひっかけて死にやした。今それを思い出して、つい涙が・・・」と真面目くさって申しますので、ヤレヤレと、今度は大きな盃が渡されました。十分に頂戴した半平どんの舌先は油の乗った如く滑らかに、頓知機な雑談が続々繰り出されて、役人達を喜ばせたことは説くまでもありません。

(日高重孝著『日向今昔物語』より)

きりしまでらあと

⑥ 霧島寺跡

霧島寺跡は、大字跡江字寺にあり、現在跡地の大部分は大淀川の河川敷（ゴルフ場）となっています。

宗派は禅宗で、近くの「寺の前墓地」にある歴代住職の墓石に刻まれた年号などから、17世紀末から18世紀初頭にかけて開基されたと考えられます。

跡地には、わずかに山門跡と仁王像（石造）が残るのみですが、仁王像は、享和元年（1801）3月7日の造立で、古城村出身で真言宗護東寺住職串間円立院の作になります。



わかみやじんじゃ

⑦ 若宮神社

若宮神社は、古くは若宮八幡宮と称しました。創建年代は不明ですが、一説（社伝）には、文治元年（1185）の壇ノ浦の合戦後、日向国宮崎郡に下向した平景清によって勧請されたと伝えられています。

若宮神社がある下小松地区には、「なぎなた踊り」または「志賀団七踊り」と呼ばれる民俗芸能が伝承されています（かつては、旧暦8月14日に若宮神社や地区の有志宅において、他の「大將軍」「清十郎」などの手踊りとともに踊られていました）。

なぎなた踊りの由来は定かではありませんが、昔、武士に無礼打ちになった農民の遺児姉弟が親の仇討を決意し、姉はなぎなた、弟は鎖鎌で武道に励む姿を表現したものとされています。姉弟に扮した踊り手4人1組になって鎌となぎなたを打ち合わせながら激しい立ち回りを演じる勇壮な踊りです。



民俗芸能 下小松なぎなた踊り

もくじぎょうどうさく せんじゅせんげんじゅういちめんかんのりつぞういっく

⑧ 木喰行道作 千手千眼十一面観音立像一軀（市有形文化財）

本像は、江戸後期の行者木喰行道の作になります。

木喰行道は、江戸時代中期に全国行脚をしながら仏像などを制作した人物で、天明8年（1788）から寛政9年（1797）の10年間、日向国分寺（西都市）に住職として滞在し、同寺の五智如来像（県指定有形文化財）などを制作しました。

大きさは、総高53.3cm、像高31.8cm、幅18cmの小像で、彫技は、丸味のある彫り方と台座の扱い方に木喰行道の特色を見ることができます。



古くは生目八幡宮と称し、豊前宇佐宮領の庄園であった浮田庄の鎮守として勧請されたと考えられています。

また、生目神社は「目の神様」として知られています。平家滅亡後に源氏に捕らえられた平景清が、「源家ノ榮達ヲ見ルニ忍ビズ」として、自らの眼をえぐって投げた先が生目であったと伝えられています。景清公の遺徳にあやかり、境内から湧き出る清らかな御神水で眼を洗うと、眼病が治り、目がよくなるということで参拝者も多く、江戸時代に松浦武四郎が著した『西海雑誌』にも「隣国近郷より諸人の参詣絶るひまなし」とその賑わい振りが記されています。



いきめじんじゃのおがたまのき

 生目神社のオガタマノキ（市天然記念物）

生目神社本殿の向かって左側にオガタマの巨木があります。

目通り幹囲3.2m、樹高17.5mで、その樹冠は東西約15mに及びます。

県内のオガタマノキは、西都市三宅寺崎と高千穂町岩戸神社境内、そして生目神社のものがよく知られています。その希少価値と古来よりの神木として生目神社に植栽された歴史的意義から、宮崎市天然記念物に指定されています。

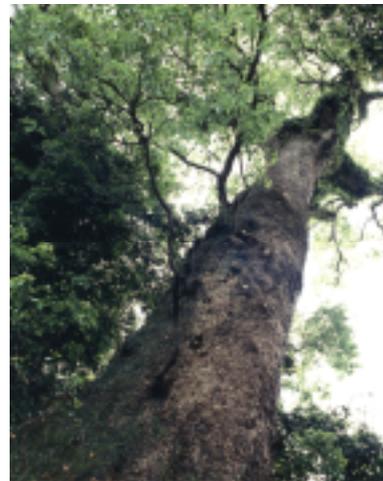


いきめじんじゃのくすのき

 生目神社のクスノキ（市天然記念物）

生目神社のクスノキは、生目神社本殿の向かって右側にあり、左側にある巨木オガタマノキと対をなしています。

目通り幹囲は8.65m、樹高25mに及ぶ巨木で、希少価値が高く、宮崎市の天然記念物に指定されています。





もくぞうしんのうめん(ほうじにねんめい)つげたりもくぞうしんのうめん(てんぶんごねんめい)
木造神王面(宝治二年銘)附木造神王面(天文五年銘) (国重要文化財)

木造神王面は南九州で最も古い宝治2年(1248)の銘をもち、大型の迫力に富んだ造形であることが注目されています。また、制作事情に八幡神との関わりが想定されることから、中世の地域信仰のあり方を示すものとして、我が国の絵画・彫刻史上特に意義のある資料であるとの評価も得ています。なお、附けたりとして天文5年銘の神王面も指定されています。



宝治二年銘神王面



附天文五年銘神王面



いきめじんじゃもくぞうしんめん(にめん)
生目神社木造神面(二面) (市有形文化財)

生目神社にある木造神面のうち一面は、縦24.4cm、横18.2cm、鼻の高さ11.3cmを測り、生目神社の鬼形面の中では小型のもので、裏の仕上げの状態から、奉納するためにつくられたものと思われます。また、紀年不詳ではありますが、残存する「口六丑年」の銘から、慶長6年(1601)の作と推定されます。

元文3年(1738)銘の神面は、縦30.6cm、横30.2cm、鼻の高さ17.5cmを測る大ぶりの面で、鼻と口は大きく彫られ、肌は朱色に、髪と眉・瞳孔は墨で黒く、歯は白色に塗られています。その特徴から、近世におけるこの種の仮面製作の一端を伺える貴重な文化財であると言えます。



紀年不詳神面



元文三年銘神面

いきめかぐら
〈民俗芸能〉 生目神楽 (市無形民俗文化財)

生目神楽は、生目神社に古くから伝わる神楽で、現在でも生目神社神楽保存会により保存継承されています。

毎年3月15日に近い土曜日の午後から夜半にかけて奉納される半夜神楽で、暮らしの平穏無事を願い、農業への豊作祈願や感謝を包含した作神楽としての意味も有しています。

現在伝承している番付は24番ですが、神招き・神送り・豊作祈願と感謝・無病息災・魔払い等、神々への祈願、人々の願いを折り込んだ神楽の様式をしっかり保持しています。宮崎平野の春神楽の成立・発展過程を知るうえでも重要な芸能と言えます。



いきめずいどう

⑩ 生目隧道

古くから、宮崎市街から生目神社に行くには、大塚町から恋ヶ迫と呼ばれる山越えの難所を通る道が利用されていました。

生目神社へ人力車・馬車等の交通の便のため、明治40年（1907）5月から隧道工事に着手し、ようやく長さ100m前後の平坦道が完成しました。

素掘りのままの荒っぽい感じの内壁のトンネルで、開通後は生目神社の参道としてはもちろん、通勤・通学路としても愛用されたと言われています。

昭和46年（1971）暮から大塚台団地の造成期に入ると、この生目隧道は旧道とともに閉鎖され、団地の下に埋没することとなり、今や当時を偲ぶものもなくなってしまいました。

こむらやくしどうせきとうぐん

⑪ 小村薬師堂石塔群（市史跡）

小村薬師堂の境内及び南側山林中には、県内でも稀な六面石幢や五輪塔、層塔等106基の石塔群が残されています。

笠部に元久元年（1204）の銘をもつ石造層塔や寛喜4年（1232）銘を持つ翁丸塔など、これほどの古い石塔群が一箇所にまとまって造立されていることでは他に類例がないと言われています。

この石塔群は、石造美術史や仏教考古学、仏教民俗学、さらに日本宗教史上の地域性の究明において重要な資料とされています。



みょうえんじあとせきとうぐん

⑫ 妙円寺跡石塔群（県有形文化財）

妙円寺は、南北朝期に創建された日蓮宗富士門派の寺院です。当時は、本山安房国妙本寺（現千葉県鋸南町）から「日向惣導師職」に任じられていた定善寺（現日向市）と密接に関係し、日向国中部における布教活動の拠点となっていたと考えられています。文和3年（1354、北朝年号）の「日睿上人縁起」（定善寺文書）には、定善寺日睿の弟日慶が、本山の日郷の遺骨を妙円寺に持ち帰り納めたことが記されています。

妙円寺跡石塔群は、千仏山本勝寺境内の西側丘陵斜面にある石塔群で、五輪塔681基、板碑546基、その他石造物10基の計1237基を数えます。最も古いものは、板碑では貞治2年（1363、北朝年号）銘、五輪塔では至徳2年（1385、北朝年号）銘のものがあり、室町時代を中心に江戸時代までの石塔群が一箇所に集中しており、県内はもとより、九州内でも類を見ないほど大規模な石塔群となっています。

また、石塔群の中には、門流系図、伊東略系図、長友略系図上の人物名を銘文に記す石造物の存在が確認されており、寺院を取り巻く在地権力の状況を知るうえでも貴重といえます。



いしづかじょう

⑬ 石塚城

『日向記』によれば、応永8年（1401）に門川伊東氏の祐武が石塚城に入城し、島津勢を追い払ったと記されています。

門川伊東氏は、惣領家伊東祐時の七男祐景を始祖とする家で、14世紀末から15世紀頃にはすでに石塚・久津良（現高岡町）・清武など、日向国中部を基盤として活動していました。その後、伊東惣領家の進出により、15世紀中頃には石塚城もその傘下に入りました。

生目小学校の敷地となっている丘陵部が石塚城であったと言われていますが、現状では遺構は残されていません。

あまりだかんのん

⑭ 余り田観音

由緒は不詳ですが、昔、松の大木があり、空洞となっていた根元に観音像が安置されていたと言われています。本尊は千手観音で、現在は2代目の像（石造）が祀られています。

平成7～8年にかけて、国道10号バイパス建設工事に伴う発掘調査が実施され、五輪塔37基、板碑12基が確認されました。最も古い紀年銘をもつものに、永正10年（1513）の板碑があります。中世高蟬城の東にあたり、妙円寺に近い位置にある石塔群として、今後の研究が期待されます。



北地域の文化遺産 (北地域自治区管内)

【地域の歴史と特色】

北地域には、古代から中世にかけて宇佐八幡宮の荘園の一つとして栄えた瓜生野地区と、中世の山城と近世の薩摩藩文化のたたずまいを残す倉岡地区があり、それぞれ特色ある文化遺産を今に伝えています。

瓜生野地区は、「和名抄」に記載される諸県郡瓜生野郷の名を継承する地域で、11世紀末頃に成立したとされる豊前宇佐八幡の荘園、瓜生野別府に比定されています。

一方、倉岡地区は、中世は倉岡名と呼ばれ、島津庄の寄郡であった穆佐院に含まれていました。中心には倉岡城があり、江戸時代には倉岡郷として薩摩藩の外城の一つに位置づけられ、麓には武家集落が形成されていきました。

【文化遺産マップ】



瓜生野地区

うりゅうのはちまんじんじゃ

① 瓜生野八幡神社

瓜生野八幡神社は、宇佐八幡宮の荘園瓜生野別府の鎮守として勧請され、古くから人々に崇拝されてきました。一説には、勧請の時期は天平9年（737）ともいわれ、宝物として元久元年（1204）銘の懸仏光背一面が伝えられています。

境内には、16本のクスノキが群落をなし、うっそうとして閑寂な社相を呈しています。最も大きいものは、目通り約9.6m、根周り約16mで高さ約25m、最も樹高の高いものは高さ約30mに達しています。

このクスノキ群の由来は不明ですが、他に例のない巨樹群として国文化財指定を受けています。



瓜生野八幡神社のクスノキ群(国天然記念物)

おうらくじ

② 王楽寺

王楽寺は、竹篠山王楽寺と称し、弘仁5年（814）天台宗の開祖伝教大師（最澄）の開山とも伝えられています。一説には、養老年間（717-724）の創建で、「王の楽しみ給ひし所なり」という故事にちなんで寺号を定めたとされています。

境内には、大永2年（1522）銘の五輪塔をはじめ、中世の石塔十数基が残り、当時の繁栄の様子を伝えています。江戸時代後期には、越前国丸岡（現福井県丸岡町）高岳寺末寺となり、明治4年（1871）に廃寺となりますが、同16年（1883）に再興されました。

本尊薬師如来は坐像で像高85.5cm、両脇侍像はどちらも立像で、左脇侍の日光菩薩は像高102.4cm、右脇侍の月光菩薩は像高101.5cmになります。3軀ともに、ヒノキの寄木造りで絹張り漆がけの上、金箔塗りで仕上げられています。平安時代の彫刻技法を用い、鎌倉時代初期に中央の仏師によって彫られたと考えられています。



木造薬師如来及び両脇侍像三軀(国重要文化財)

こんごうじ

③ 金剛寺

建武3年（1336、北朝年号）の創建で、開基檀那は花山院家定妻、開山は佐土原大光寺開山岳翁長甫の法弟祚廣天沢と伝えられています。寺には、原文書3通を含む10通の中世文書が伝えられ、創建当時の瓜生野別府と荘園領主の様子を知るうえで貴重な史料といえます。



金剛寺文書(県有形文化財)

うりゅうのそんこふん

④ 瓜生野村古墳（県史跡）

瓜生野村古墳は、上北方地区と瓜生野地区に分布する高塚墳、横穴群の総称です。当初は前方後円墳1基、円墳6基、横穴40基が指定されていましたが、現在は円墳2基と横穴31基が確認されています。

この近辺には、この他に前方後円墳2基（野首古墳・アブミ古墳）と多数の横穴が未指定古墳として確認されています。



いわとじんじゃ

⑤ 磐戸神社

アマテラスオオミカミが隠れた天磐戸と伝えられる岩窟を本殿とし、拝殿一字を建立した社です。別当寺に吾平山磐戸寺がありましたが、明治2年（1869）に廃寺となりました。

宝物に瓜生野八幡神社と同じ元久元年（1204）銘の懸仏光背一面が残されています。元禄2年（1689）には、磐戸寺に対し、延岡藩主有馬永純より高2石の加増がなされ、元の5石と合わせて高7石が除地とされました。



じきじゅんじ

⑥ 直純寺

山号は笠置山と称し、寺号は延岡藩主有馬直純の名に由来しています。元和年中（1615-24）、直純は稲津掃部助の宮崎城攻めで戦死した宮崎城主権藤種盛の孫、門解を招いて創建しました。初めは光勝寺と称しましたが、正保4年

（1647）に直純の子康純が寺号を直純寺と改めたといわれています。

境内南隅には、権藤種盛父子の墓碑があります。これらの墓碑は、初め池内にありましたが、寺から離れて不便だったため、三世寿円（種盛五代の孫）によって境内に建立されました。



宮崎城主 権藤種盛の墓

倉岡地区

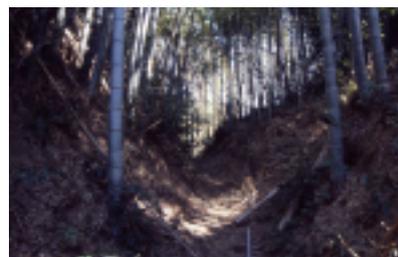
くらおかじょうあと

⑦ 倉岡城跡

倉岡城は、池尻城とも称し、大淀川左岸の南に張り出す独立丘陵上に立地しています。

築城の時期は不明ですが、貞和4年（1348、北朝年号）頃、伊東祐持の日向下向に伴い、都於郡城（現西都市）を押領していた守永祐氏が池尻に移っています。また、応永10年（1403）には、兄元久の命により穆佐城に入った島津久豊が、池尻（倉岡）・白糸・細江に城を築いたとされ、このとき倉岡城が城郭として本格的に整備されたことがうかがえます。慶長5年（1600）には、伊東方の稲津勢が糸原などに火を放ったため、地頭丹生備前信房率いる倉岡勢が城に立て籠もっています。

江戸時代初期に記された『伊地知重順覚書』には、倉岡城普請の記事が記され、大手口・水手口・内城・中城・東小城・西小城・外城などの施設名が記されています。現在は、曲輪の一部に倉岡神社が鎮座し、その背後の丘陵に土塁や堀切などの遺構が残されています。



くらおかじんじゃ

⑧ 倉岡神社

当初は凶師大明神と称し、倉岡郷の鎮守として建立されました。江戸時代は、高岡郷の花見村にありましたが、明治4年（1871）に、城山鎮座の稲荷大明神などを合祀して倉岡神社と改称し、現在地に移りました。さらに明治37年（1904）には城山鎮座の愛宕神社を合祀し、郷社に指定されました。

倉岡神社では、2年に1度、秋の御神幸の際、獅子とハレハレが2頭ずつ神様の警護や先触れをして歩く習わしがあります。ハレハレとは、赤と白の鬼面をかぶり、腰に魚籠をさげ、葉のついたかずらを全身に巻きつけた若者が、長さ1間程の青竹で道を清めながら「ハラエタマエ、キヨメタマエ」と進むもので、その言葉が転じて「ハレハレ」と呼ぶようになりました。



民俗芸能 倉岡神社ハレハレと獅子舞

たにむらけいすけきゅうたくあと

⑨ 谷村計介旧宅跡（県史跡）

谷村計介は、嘉永6年（1853）2月13日に倉岡村糸原に生まれました。西南戦争では官軍に属し、薩軍に包囲された熊本鎮台（熊本城）を脱出し、苦心の末、高瀬（現熊本県玉名市）に置かれた官軍本営にたどり着き、救援の密使役を果たしました。その後の田原坂の戦いにおいて、25歳の若さで戦死しています。

旧宅跡には、「贈従五位陸軍伍長谷村計介誕生之地」と刻まれた石碑と墓所が残されています。



りゅうせんじあと

⑩ 竜泉寺跡

竜泉寺は、初め天台宗、後に高岡竜福寺（曹洞宗）の末寺となり、江戸時代は倉岡郷の菩提所として位置付けられていました。現在は、共同墓地として整備されていますが、墓地東端の山腹には、今も歴代住職の墓碑などが残されています。

墓地の一角に、川内川干拓の父と呼ばれ、晩年に倉岡郷で在勤し、88歳で亡くなった小野仙右衛門の墓があります。元和5年（1619）に鹿児島で生まれた仙右衛門は、土木工事の技術を買われ、藩内の多くの開田事業にたずさわりました。延宝7年（1679）には、8年の歳月を費やし、高江地方（現鹿児島県薩摩川内市）の大干拓事業を成し遂げました。このときの難工事に際し、千右衛門は娘袈裟姫を祈願のため人柱として捧げたといわれています。現在、この干拓事業によって開かれた高江地方では、千右衛門の偉業をたたえ、小野神社を建立し、命日には感謝祭が催されているということです。



小野仙右衛門の墓

あさくらでら

⑪ 朝倉寺

朝倉寺は、金崎の朝倉山の中腹にあり、寺伝によれば、百済の官人日羅の開創とされ、日向七堂伽藍の一つとされています。当初は真言宗であったようで、本尊は大日如来、朝倉山龍岸寺と呼ばれていました。その後に改宗し、江戸時代は飢肥長持寺末寺、明治17年（1884）の宮崎県寺院明細書によれば、本尊は釈迦如来で曹洞宗と見えます。また、朝倉観音はその奥の院にあたります。

寺には、木喰行道の遺墨とされる書幅が残されています。寛政5年（1793）の作で、「南無薬師如来」の6字と薬師如来像が描かれています。木喰が国分寺（現西都市）住職として日向国に滞在しているときに制作されたものです。

このほか、境内には古城護東寺の六世住職串間円立院が彫刻したといわれる石造仁王像と弘法大師像があり、寺を訪れる参拝客を見守り続けています。



木喰行道筆 南無薬師如来書画一幅(市有形文化財)

かわぐちばんしょあと

⑫ 川口番所跡

薩摩藩では、河川を行き来する船を監視し、人や荷物の出入を取り締まるため、主要河川に津口番所を設置しました。倉岡郷には、大淀川と本庄川が合流している川岸に川口番所が設けられ、鹿児島から派遣された番所役人が取締りを行っていました。付近の地名から、俗に「杣山（そまやま）の関」とも称し、渡船が往来していた現在の柳瀬橋付近は「杣山の渡し」と呼ばれていました。

現在は、河川改修のため様相は一変し、その形跡はとどめていません。



くらかししょうがっこうのしろバナフジ

⑬ 倉岡小学校のシロバナフジ（市天然記念物）

ノダフジ系の白花の品種シロバナフジで、倉岡小学校の校庭に植栽されており、地域の人々からは「倉岡小学校のシラフジ」と呼ばれ親しまれています。

明治22年（1889）に寄贈を受け、当時の倉岡小学校に移植されましたが、明治42年（1909）の倉岡尋常小学校移転に伴い、現在地に移されました。樹齢は百数十年といわれ、根周り3.1mのまれに見る巨木で、毎年見事な花を付けています。

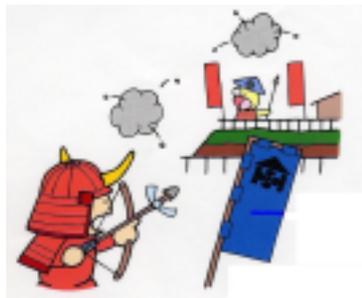
県内には、中国産のオオシラフジを除けば、他にフジの指定文化財はなく、ましてや日本産ともなれば、全国的にも指定樹木が少なく、貴重な文化財といえます。



くらかそんこふん

⑭ 倉岡村古墳（県史跡）

糸原地区にある前方後円墳1基、円墳3基、横穴5基が指定されています。現在は、平野部と尾根の突端部に前方後円墳1基と円墳3基、西側の丘陵部に横穴3基が確認できます。



佐土原地域の文化遺産 (佐土原地域自治区管内)

【地域の歴史と特色】

佐土原地域は、宮崎市の北部に位置し、地域のほぼ半分を日向灘へと東流する一ツ瀬川によって形成された沖積低地が占めています。

古代の国郡制のもとでは那珂郡に属し、上田島・下田島一带は「和名抄」に記載される「田嶋郷」に比定されています。また、11世紀後半には、宇佐八幡宮の荘園として、永保3年(1083)に那珂庄、寛治7年(1093)に田島庄が成立しました。それぞれ現在の那珂地区・上田島地区に比定されています。

中世の佐土原は、当初は田島伊東氏、後には伊東惣領家が支配するところとなり、佐土原城跡や大光寺など、佐土原地域の中世の歴史にまつわる貴重な文化財が多数残されています。

江戸時代は、佐土原藩領となり、島津氏が10代にわたって支配するところとなりました。佐土原城の麓上田島に城下町が形成され、明治2年(1869)に藩主島津忠寛が広瀬に転城するまでの間、藩の中心地として発展を遂げました。

【文化遺産マップ】



佐土原地区

さどわらじょうあと

① 佐土原城跡（国史跡）

築城の時期は不明ですが、室町から戦国期にかけては、伊東氏の中心的な城郭として位置付けられていました。天文年間（1532-55）には、伊東氏の家督継承争いのなかで、長倉能登守に擁立された伊東祐吉が佐土原に入城しています。祐吉の死後は兄の義祐（この時は祐清）が佐土原に入城し、晩年に自らの隠居所とするなど、佐土原城を都於郡に次ぐ居城として位置づけました。

天正5年（1577）、島津氏の進攻によって伊東氏が豊後に落去すると、替わって島津家久が入城しました。以後、関ヶ原の戦い直後に幕府領となった一時期を除き、江戸時代を通じて島津氏の支配するところとなりました。

佐土原城は、馬蹄形を呈する丘陵を巧みに利用した山城で、南九州唯一の天守がありました。その後破却され、江戸時代初期には城そのものが麓に移されました。現在は、麓に建設された佐土原歴史資料館で、佐土原地域の歴史や文化について学習することができます。



佐土原歴史資料館（鶴松館）

だいこうじ

② 大光寺

じこくほうでん（もんじゅどう）

📷 自国宝殿（文殊堂）

大光寺は、建武2年（1335）に領主田島伊東氏が檀那となり、岳翁長甫を開山に迎え創建されました。京都東福寺派の寺院として繁栄し、天文11年（1542）には、京・鎌倉の五山に次ぐ十刹の位置に列せられました。

自国宝殿は、文殊堂、仏殿あるいは開山堂とも呼ばれ、中には開山岳翁長甫坐像が安置されています。建物の構造は、棧瓦葺き入母屋造の唐様（禅宗様）であり、建築年代は室町期まで遡ると考えられています。



木造岳翁長甫坐像（一躯）（国重要文化財） ➡

もくそうきしもんじゅぼさつおよびわきじそう
 木造騎獅文殊菩薩及脇侍像（国重要文化財）

運慶（?-1223）5代の孫康俊の作で、文殊菩薩像の底には「貞和4年（1348、北朝年号）」の朱銘が残されています。文殊像は獅子背上の蓮台に乗り、木造寄木造で、彩色、玉眼が施され、右手に剣、左手に巻物を持っています。脇侍には、善財童子像、仏陀波利像、最勝老人像、優填王像を従え、中国五台山へ向かう渡海文殊の姿をあらわしています。



こげつぜんじぶんこつとう
 古月禅師分骨塔（県史跡）

「東の白隠、西の古月」と称され、江戸期禅宗の中興の祖とも呼ばれる古月禅師の分骨塔です。禅師は、佐土原町佐賀利の出身で、10歳で仏門に入り、後に藩主惟久の命により大光寺四十二世住職となりました。禅の教えを広め、多くの俊傑を育てるとともに、庶民の生活善導にも心をくばったため、禅師の人生訓を歌い込んだ盆踊り歌「いろは口説」が作られ、今も町民の間で歌い継がれています。



たじまいとうしくようとう
 田島伊東氏供養塔

伊東氏庶家の田島伊東氏の日向国下向は13世紀中頃といわれています。伊東祐時の四男祐明は、蒙古襲来をきっかけに、すでに伊東氏所領であった田島庄（現在の田島周辺）に下向し、田島氏を称しました。大光寺境内脇に残る4基の五輪塔は、田島氏縁の供養塔と伝えられています。後に大光寺の開基檀那となった田島氏と寺との密接な関係を示す資料の一つとなっています。



こうげついん
 ③ 高月院

高月院は、初代佐土原藩主島津以久の3回忌を機に、慶長17年（1612）に2代藩主忠興によって創建されました。寺名は、以久の戒名「高月院殿前典厩照誉崇恕居士」に因んだものです。以来、藩主の菩提寺として保護を受け、墓所には藩主や正室、側室などの墓が立ち並んでいます。



佐土原藩島津家御廟所（高月院）（市史跡）

てんしょうじあと

④ 天昌寺跡

天昌寺は、鹿児島福昌寺（曹洞宗）の末寺で、天正17年（1589）に代賢和尚が開山となり創建されました。初め梅天寺（島津家久の仏号）、後に天昌寺（同豊久の仏号）と称し、家久・豊久の菩提寺として位置づけられました。

家久は、天正7年（1579）に佐土原城主となり、同15年に急病のため41歳で亡くなりました。その子豊久は、関ヶ原の戦いで伯父島津義弘の身代わりとして敵中に突入し、31歳の若さで戦死しました。墓所には、家久・豊久一族をはじめ、関ヶ原の戦いで戦死した家臣たちの墓塔が立ち並んでいます。

島津家久・豊久公墓二基(市史跡)



こたじんじゃ

⑤ 巨田神社

こたじんじゃほんでん

📷 巨田神社本殿（国重要文化財）

巨田神社は、古くは巨田八幡と称し、田島庄の鎮守として崇敬されていました。本殿は三間社流造りで、南九州では数少ない中世建築の遺構であり、県内では最古のものになります。昭和56年の大改修に伴い発見された棟札により、天文19年（1550）の建築であると考えられています。残された棟札によって後世の修理の歴史が分かるということで、22枚の棟札も国の重要文化財となっています。

また、左右の摂社若宮社と今宮社は、一間社流造り、とち葺きの屋根で、本殿同様貴重な建築物として、県有形文化財に指定されています。



こたいけのかもあみりょう

📷 巨田池の鴨網猟（県無形民俗文化財）

古くから伝えられる狩猟法で、越網とも呼ばれています。巨田池から飛び立つ鴨を「坪」と呼ばれる丘陵の猟場で待ちうけ、Y字型をした竹と木の内枠に網を張った用具を投げ上げて捕らえるもので、毎年11月15日から2月15日までの猟期にのみ行われています。

同様の猟法は、全国でも巨田池と石川県加賀市の片野池の2箇所しかなく、貴重な伝統猟法として県の無形民俗文化財に指定されています。



しょうか「きゅうさかもとけ」

⑥ 商家「旧阪本家」（市有形文化財）

阪本家は、江戸時代から続く味噌・醤油醸造及び刻煙草の販売を営む商家です。この界隈は、高麗町と呼ばれ、佐土原城下の商人町として、短冊状に街路が形成されていました。

この建物は、明治38年（1905）に建築された、重層入母屋造りの平入り2階建て、1階の玄関土間、屋根瓦の「平」の屋号、大棟の鬼瓦に残る「木瓜」の家紋など、随所に商家の遺風をとどめています。明治期の姿を残す貴重な憩いの景観として、宮崎市景観重要建造物にも指定されています。



広瀬地区

ひさみねかんのんどう

⑦ 久峰観音堂

日向七堂伽藍の1つで、大悲山補陀洛院久峰寺と称し、百済の官人日羅の開基といわれています。

中世以来、熊野の修験道が盛んな場所で、現在も境内に明応3年（1494）銘の五輪塔や天文4年（1535）銘の板碑などが残されています。

江戸時代には、都於郡の黒貫寺（現西都市）の末寺となり、佐土原藩から観音領10石を拝領していました。雨乞祈禱など護摩修法を行い、恵日には藩から役人数人が泊り込みで派遣されていました。

明治7年（1874）の黒貫寺焼失に伴い、本尊聖観音とともに観音堂が黒貫寺に移されたため、ここには富田村（現新富町）伝宗寺の聖観音と建物を譲り受け、現在に至っています。



久峰観音堂の仁王像

そがどんのはか

⑧ 曾我どんの墓

田島地区の南方丘陵上に「曾我殿の墓」と呼ばれる石塔9基が残されています。「曾我殿」と言えば、建久4年（1193）5月に、曾我十郎・五郎兄弟が富士野の狩場で父の敵であった工藤祐経を討ち果たした話が有名ですが、この石塔群は曾我兄弟にまつわる物ではなく、田島氏に関する石塔ではないかと考えられています。

伊東祐時の四男祐明は、蒙古襲来をきっかけに、すでに伊東氏所領であった田島荘（現在の田島周辺）に下向し、田島氏を称しました。

田島伊東氏関係の石塔は、大光寺の敷地内にもありますが、同様に、この9基の石塔群についても、鎌倉から南北朝期における田島伊東氏について知ることのできる貴重な文化財となっています。



さどわらじゅうろくれっしのはか

⑨ 佐土原十六烈士の墓

貞享5年（1688）3月19日、遠州灘を通り江戸へ向かう佐土原藩の御手船が嵐に遭いました。沈没の危険にさらされ、やむを得ず「荷打ち」（荷を海に投じること）し、全員無事で伊豆下田港に漂着しました。

宰領河越久兵衛、河越太兵衛、成田小左衛門はその責任をとり自害。船頭権三郎も「荷打ち」を命じた責任を感じて割腹して自害し、他の船員12名もこれに殉じました。

下田の大安寺には、このことを示した古文書とともに、16人の墓が建立されています。

一方、佐土原町徳ヶ淵では、何時の頃からか宰領河越家の墓石を中心に、付近の無縁仏の墓石を合わせ、十六烈士の墓として今に下田の思いを語り継いでいます。



ひょうたんじまのさいごうさつせいぞうしょあと

⑩ 瓢箪島の西郷札製造所跡

西南戦争で薩軍が戦費不足解消のために発行した紙幣、いわゆる「西郷札」の製造所が石崎川の瓢箪島（現宮崎県埋蔵文化財センター付近）にあります。

明治10年（1877）6月20日の金札発行の布達以後、10円、5円、1円、50銭、20銭の6種、合計16万円余を印刷したといわれています。通用期限を3年とする不換紙幣でしたので、信用に乏しく、戦後は社会に様々な後遺症を残しました。

那珂地区

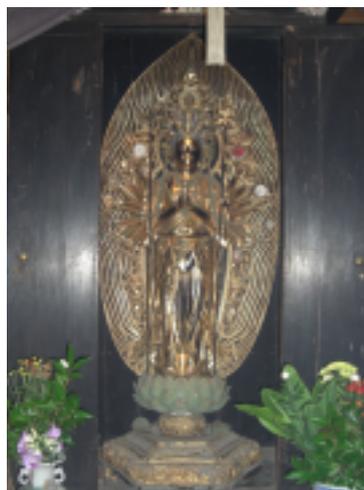
びょうどうじあと

⑪ 平等寺跡

現在、東上那珂の平等寺地区にある平等寺観音堂は、建久2年（1191）に創建されたと伝えられる真言宗寺院、日照山平等寺跡になります。

平等寺は、那珂地域の有力寺院で、室町・戦国期には伊東氏と密接な関係にありました。『日向記』には、天正3年（1575）に伊東加賀守の跡目争いが発生した際、その指南役として都於郡（現西都市）の一乗院と対立する様子が記されています。また、江戸時代には、黒貫寺末寺として、佐土原藩から寺領10町余を持つ大寺院として栄えました。

現在は、地区の人々によって本尊千手観音と脇侍毘沙門天・不動明王が祀られ、境内に残る五輪塔などに当時の面影をとどめています。



平等寺観音堂に安置される千手観音像

田野地域の文化遺産 (田野地域自治区管内)

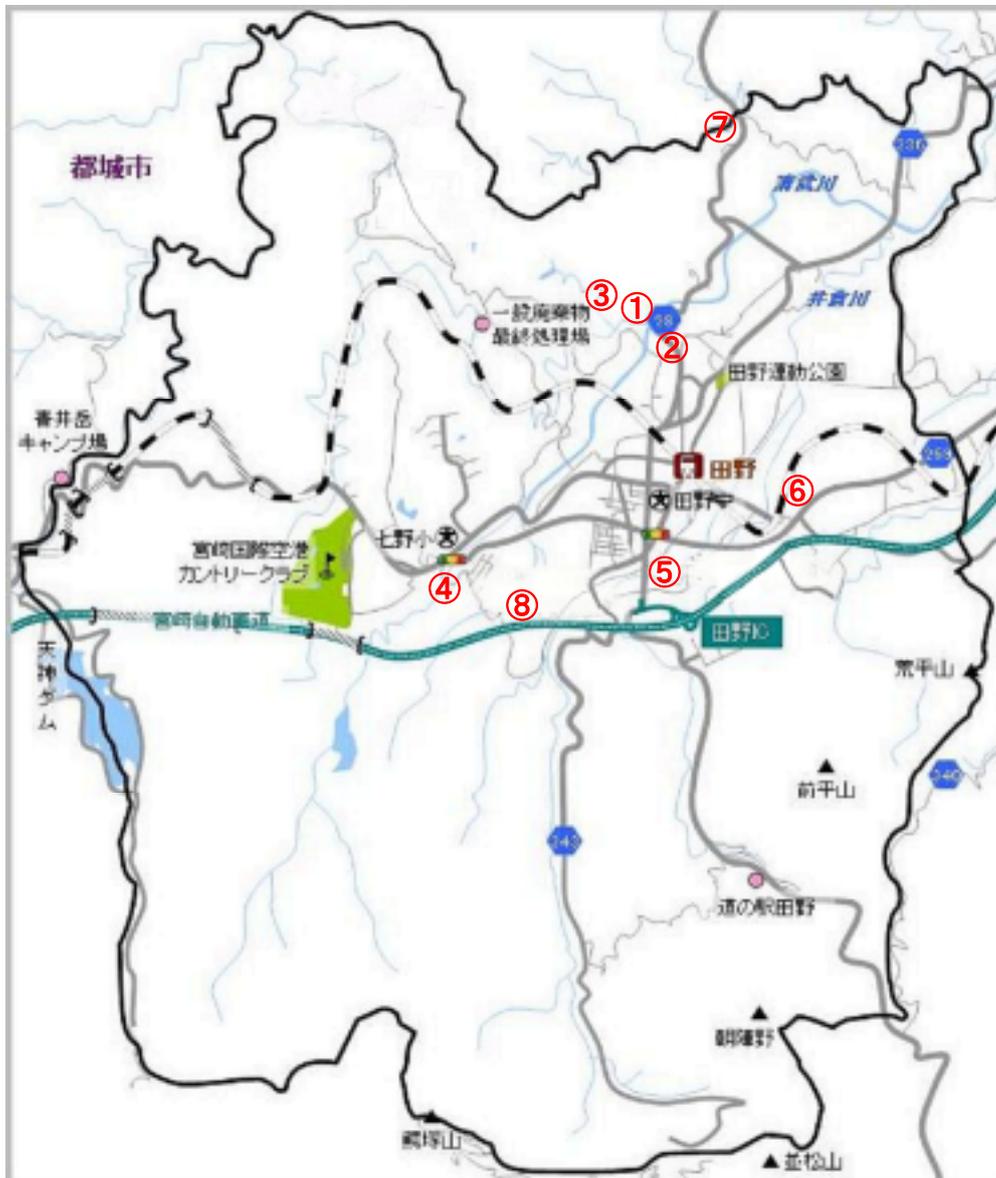
【地域の歴史と特色】

田野地域は、宮崎市の南西部に位置し、南西に鱈塚山、東部に荒平山、西部から北部にかけて丘陵状の山々が連なり、それらに囲まれる形で東西に長い田野盆地在が広がっています。

古代律令制下は、諸県郡・宮崎郡のいずれに属していたかは不明ですが、南北朝期には八条女院領国富庄に含まれていました。

近世は、田野村と見え、飢肥藩領清武郷の内にありました。

【文化遺産マップ】



かりやばるじょうあと ① 仮屋原城跡

松山川と別府田野川に挟まれた断崖の上に築かれた、東西約350m、南北約150mを城域とする山城です。

仮屋原城の築城年代は不明ですが、暦応2年（1339、北朝年号）5月9日の足利直義感状（小串文書）には「日向国々富庄内田野城合戦事」と記され、この「田野城」が仮屋原城と考えられることから、少なくとも南北朝期には城郭が存在したと考えられます。

文安5年（1448）には、伊東祐堯の領有するところとなり、伊東氏48城の一つにも数えられました。『日向記』には、永禄年間（1558-70）の城主に長倉河内守とその子宮内太夫の名が記されています。



かりやばるけいこく 📷 仮屋原溪谷

仮屋原城の麓を流れる松山川と別府田野川の流域一帯は、化石の採集地として知られています。

平部嶺南の『日向地誌』には、田野村の「化石溪」として紹介され、借屋原を流れる松山川に化石が多く、ウナギ・カニ・サザエ・シジミなどが採取されるとの記述が載せられています。海産のものは、これまで50種類の発見が報告されており、中には学名で「タノ」の名が付く巻貝「タノツブリ」と二枚貝「タノスダレ」もあります。また、近年では「メガロドン」という巨大鮫の化石も発見されています。



ながくらかわちのかみのはか ② 長倉河内守の墓

仮屋原城から別府田野川を隔てた小さな丘陵上にあります。塔は高さ165cmで、各部材の正面に「南」「無」「阿」「弥」「陀」「仏」と、塔身部分正面に「経阿弥陀仏」「天正四年（1576）丙午」の文字が刻まれています。

詳しい記録は残っていませんが、永禄年間（1558-70）の田野城主として『日向記』に記される長倉河内守の墓と伝えられています。

また、ここから少し離れた上屋敷の公民館近くに「干時永禄十年（1567）丁卯三月吉日」の紀年銘が記された宝塔があります。二重の礎石の上に塔身、その上に火輪型の笠石、請花と五重の相輪をもち、田野町域では、最も古い石塔になります。



かりやばるろくじそうとう
③ 仮屋原六地藏塔

仮屋原墓地入口に、寛延3年（1750）の紀年銘が刻まれた六地藏塔があります。

角柱の上部に天蓋石を乗せたもので、台石はありません。角柱の一面には、それぞれ地獄・飢餓・畜生・修羅・人間・天人と名無地藏大士の文字が刻まれています。

田野地域には、このほか築地原、中渡瀬、上屋敷、南原の墓地にも六地藏塔が残っています。



ひだかじょうあと
④ 日高城跡

築城年代や城主など、城に関する記録は残っていませんが、仮屋原城の支城ではないかと考えられています。

現在は、曲輪や土橋のほか、防御施設として土塁、堀切、切岸などが残り、土地所有者の厚意により、登城の通路などが整備されています。



ぶつとうそんぐんそうぶつ
⑤ 仏堂園群像仏（市史跡）

四国八十八ヶ所の弘法大師の霊場巡礼を模して作られた石仏で、本来は各所に分けて置かれていたものを一ヶ所にまとめたのが、この群像仏です。桜木嘉平氏が発願施主となって作られたものですが、制作年は不明です。

他に数は少ないですが、尾脇の稲荷山と黒草にも同様のものがあります。また単独仏として各地に分置したものも残っています。



うめたにばし
⑥ 梅谷橋（市有形文化財）

梅谷地区と尾平地区を結ぶ道路を開通させる際に、清武川支流の山住川に架けられた太鼓橋で、昭和3年（1928）に奥園末吉氏が請負人となって架橋したものです。橋脚はアーチ型で、破損もなく良好な状態を保っています。当時は主要な道路として使用され、馬車の往来もあったそうです。



うちのはえたいこばし
⑦ 内の八重太鼓橋

旧田野町と旧高岡町の境界となる黒北川に架かる、長さ約12m、幅4mの石橋です。昭和11年（1936）に架橋されたもので、高欄はガードレールに変わり、路面は舗装されて面影を残していませんが、アーチ型をした橋脚部分は傷みもなく良好に残っています。工事請負者等の記録は残っていません。

田野町域には、梅谷橋や内の八重太鼓橋をはじめ、計7件の石橋（水路橋を含む）が現存しています。すべてアーチ型で、このうち黒草水路橋は、昭和初期に架橋されたものです。築地原水路橋1号は大正2年（1913）、同2号は昭和初期、元野太鼓橋は大正11年（1922）、唐仁田太鼓橋は明治36年（1903）の架橋で、いずれもほぼ良好な状態を保っています。



唐仁田太鼓橋 ➡

たのちょうあまだいこ
〈民俗芸能〉 田野町雨太鼓（市無形民俗文化財）

島津氏と伊東氏との攻防が繰り返されていた頃、田野から伊東方として出陣した際に使用した陣太鼓が雨太鼓の起源と伝えられています。

また、明治時代の干ばつが酷かった頃に、雨乞いを目的として各集落で作成し、利用されるようになったとも考えられています。太鼓は、タブの木などの大木をくり貫いて作成されています。



さきぜちくしろぜめおどり
〈民俗芸能〉 鷺瀬地区城攻め踊り（市無形民俗文化財）

戦国期に高岡の穆佐城を攻めた清武勢に田野からも軍勢が加わりましたが、その際に敵の油断を誘うため農民姿に変装し、武器を見せずに面白おかしく踊りながら攻め入ったことに由来するものが、この城攻め踊りと伝えられています。

孟宗竹で作った長さ2mほどの棒を50本ほど束ね、色とりどりの紙の花びらを付けた束を背負い、鐘や太鼓を打ち鳴らしながら舞い踊る姿は、とても勇壮です。



ちくちばるぼうおどり
〈民俗芸能〉 築地原棒踊り

伊東氏が元龜3年（1572）の木崎原の戦いで島津氏に破れ、天正5年（1577）から約10年間、田野を含めた宮崎郡も島津領となりましたが、この頃に現在の三股町あたりから伝わったのが、この棒踊りであったと言われています。

浴衣着に、赤・青・黄色の長たすきを掛けた衣装で、鎌を持つ2人、三尺棒を持つ2人と六尺棒を持つ2人がそれぞれ分かれて戦いながら舞い踊る、迫力のある芸能です。



もとのぼるいせき
⑧ 本野原遺跡（国史跡）

鰐塚山系の山麓にある、縄文時代後期を中心とする集落遺跡です。集落の中心となる部分は、直径約100mにわたって浅い窪地状に削られており、縄文時代の広場だったと考えられます。竪穴住居が113軒のほか、堀立柱建物、道跡、墓穴、貯蔵穴など、縄文時代の生活に関わる多くの遺構が、大量の遺物と共に発見されました。特に竪穴住居の検出数は西日本で最多となります。



高岡地域の文化遺産 (高岡地域自治区管内)

【地域の歴史と特色】

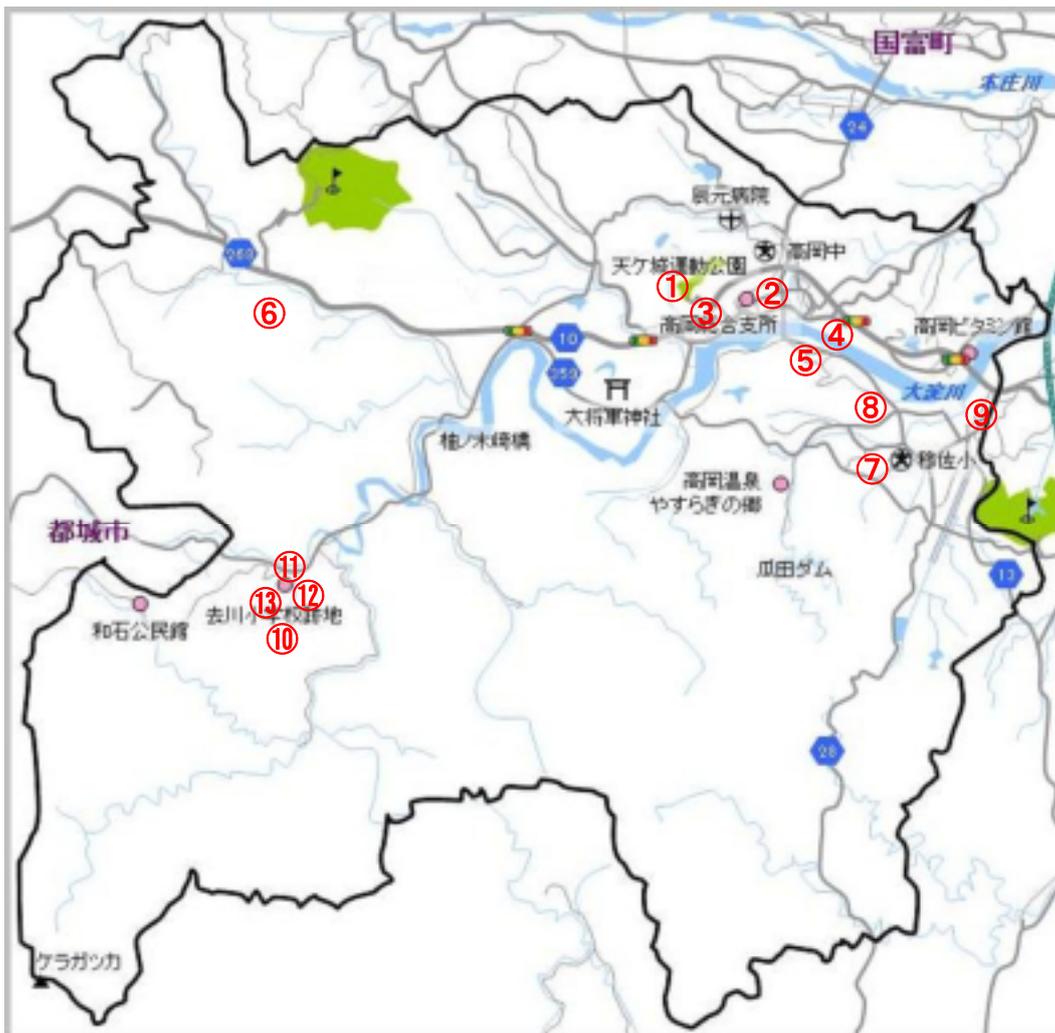
高岡地域は、中世は島津荘の一部である穆佐院の中心として、近世は薩摩藩の麓武家集落として栄え、豊かな自然のもと様々な歴史と自然の文化遺産が生み出されました。

高岡は、慶長5年(1600)に、関ヶ原の戦いの帰途にあった島津義弘によって創設された外城の一つで、この時以来、天ヶ城の麓に武家集落が形成されました。

一方、穆佐は、穆佐院政所が置かれ、近辺の政治・経済の拠点となった地域で、南北朝の争乱や島津氏と伊東氏の争いなど、穆佐城を中心として数多の戦乱に巻き込まれました。江戸時代には、薩摩藩の外城の一つとして栄え、現在も武家屋敷の面影が残っています。

去川には、薩摩藩の街道の要衝として関所(境目番所)が設けられ、関跡やその御定番を勤めた二見家の住宅など、多くの文化遺産が残されています。

【文化遺産マップ】



高岡地区

あまがじょうあと

① 天ヶ城跡（市史跡）

慶長5年（1600）、関ヶ原の戦いからの帰途にあった島津義弘は、稲津勢が三名（現国富町）あたりを放火してまわるのを目の当たりにし、高岡の地を藩境の重要拠点と考え、天ヶ城を築き、外城を高岡と命名しました。このとき、藩内から700余家が移住し、天ヶ城の曲輪に屋敷を構えた武士もいましたが、同7年には城内を引き取り、麓に武家集落が形成されました。

城域は約6haで、標高120m以上の丘陵に14ヶ所以上の曲輪が設けられています。平成3年6月から翌年10月まで行われた発掘調査では、17世紀初頭の掘立建物跡や溝状遺構など、島津義弘が築城したとされる頃の遺構や遺物が出土しました。



たかおかふもとぶけやしきぐん

② 高岡麓武家屋敷群

たかおかふもとぶけじゅうたく（もとよしけ）

📷 高岡麓武家住宅（本吉家）

この建物は、井上地区にあった「本吉家」の住宅を保存のために移築したものです。19世紀中頃に建てられた住宅で、中廊下をはさんで鍵手に「接客部」と「居住部」に分かれるなど、薩摩藩の武家住宅に見られる二棟造りの形式をよく残しています。敷地の南側には同じく「本吉家」から移築した武家門、東側には従来からある「吉富家」の武家門が残されています。

【公開日】

毎週土、日、祝日

かわかみけぶけもん

📷 河上家武家門（市有形文化財）

高岡麓に残る武家門の1つです。棟札に正徳元年（1711）とあることから、今から約300年前に建てられたことが分かります。後方に控柱を付した腕木門で、薩摩藩の武家門の特徴を色濃く残しています。扉は観音開きで、一説には80石以上の武家だけに許されたと言われていました。

河上家の禄高は200石程で、郷士年寄役や弓術の指南家を勤めるなど、高岡郷では上級武士でした。



あんどうけぶけもんといしがき

📷 安藤家武家門と石垣（市有形文化財）

河上家武家門と同様に、後方に控柱を付した腕木門として、薩摩藩武家住宅の特徴をよく残しています。安政4年（1857）の大火で焼失し、まもなく再建されたと伝えられています。

本来、高岡郷の武家屋敷の垣は、竹の生垣を横2段の割竹で固定したものでしたが、幕末になって石垣が許可されると、次第に竹の生垣は石垣へと変わっていきました。

安藤家は、安永8年（1779）の「高岡衆中高帳」（市指定有形文化財）によれば、禄高93石程で、高岡郷では上級武士でした。人々からは「あんづどん」と呼ばれ、分限者として知られていました。



いちきけながやもん

📷 市来家長屋門（市有形文化財）

長屋門は、門の出入口の両側または片側に部屋が設けられている門で、高岡麓では市来家長屋門が現存する唯一のものです。門と長屋が棟の高さを異にしているところに特徴があり、長屋門の初期的な形態をよく留めています。

市来家は、安永8年（1777）の「高岡衆中高帳」によれば、禄高300石程で、記載されている衆中の中で最も高い禄高を所持しています。江戸後期に直心影流の剣術師範を勤めていたため、この門も人々から「道場門」と呼ばれていました。



りゅうふくじあと

③ 龍福寺跡

龍福寺は、「高岳山龍福寺」と称し、慶長5年（1600）に高岡郷の菩提寺として創建されました。鹿児島福昌寺（曹洞宗）の末寺で、一説には、島津義久の号「龍伯」の一字「龍」をとって寺号としたと伝えられています。現在の龍福寺墓園が境内跡で、明治初年の廃仏廃釈により廃寺となりました。

寺跡に残る仁王尊は、江戸時代の高岡の豪商、横山勘兵衛が寄進したものと言われ、廃仏棄釈により首、手を折られましたが、幸いなことに篤志家によって修復され、現在に残されています。口を開いた像を「金剛」、口を閉じた像を「力士」と呼びます。



龍福寺仁王尊(市指定史跡) ➡

あわのじんじゃ

④ 栗野神社

祭神は、大己貴尊（大国主命の別名）他7神で、江戸時代には栗野八社大明神と称しました。勧請の年代はつまびらかではありませんが、応永年間（1394-1428）には、穆佐に在城していた島津久豊が崇拝し、穆佐院300町の惣廟として神領7町を寄進しました。

江戸時代には、高岡郷惣廟として島津氏の庇護を受け、神領18石余が与えられました。現在の社殿は、嘉永5年（1852）に再建されたもので、銅板葺き入母屋造の本殿に、棧瓦葺き入母屋造の舞殿・拝殿が残されています。

旧暦6月27日の祭礼には、御輿を船に乗せ、宮崎の上野町まで浜下りの御神幸がなされたといわれ、10月の祭礼では、流鏝馬の神事も行われていました。



大正時代の祭礼の様子(流鏝馬神事) ➡

げっちばい

⑤ 月知梅（国天然記念物）

月知梅は、もとは香積寺（曹洞宗龍福寺末）の客殿の庭にあった梅で、延宝元年（1673）に島津氏19代当主・島津光久が上洛の途上立ち寄った際、月知梅と命名したのがその由来と云われています。安永-天明年間（1772-89）までは1株でしたが、枝が垂れ、地について株をふやし、現在では70株ほどになっています。枝が地を這う姿から臥竜梅とよばれ、その有様は「群竜の翻るが如し」として囃されました。

月知梅を訪れた文人墨客に、高山彦九郎、安井滄洲がおり、日記や漢詩に梅の様子を記しています。

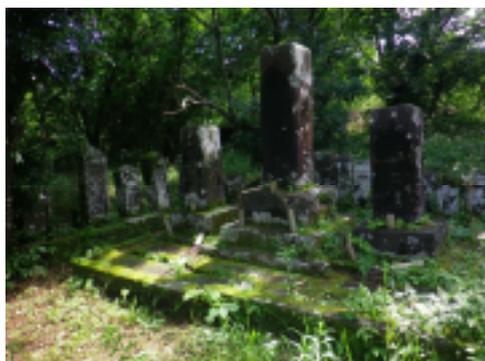


ほんえいじあと

⑥ 本永寺跡

本永寺は、幕末まで浦之名村深水にあり、日蓮宗富士門流の学頭職の寺として栄えました。日向出身の日要上人（1436-1514）が師の日朝上人（?-1498）を開山として招いたのがはじまりで、その後、本山安房妙本寺中興の祖日我上人（1508-87）を輩出するなど、中世には流派の経営に大きな影響力を持ち続けました。

現在、深水にある寺跡には、近世のものと考えられる石塔類が数多く残され、往時の繁栄の様子をうかがい知ることができます。



穆佐地区

むかさじょうあと

⑦ 穆佐城跡（国史跡）

穆佐城が初めて文献史料にあらわれるのは、南北朝期の建武2年（1335）で、足利尊氏の所領であった穆佐城に南朝方の伊東祐広が攻め寄せたと記されています。その後も穆佐城は宮崎平野の北朝方の拠点であったため、たびたび争奪戦が繰り返されました。

15世紀初め、島津氏が宮崎平野に進出すると、穆佐城には当主元久の弟久豊（8代当主）が入城し、半世紀にわたって伊東氏との間で争いが繰り返されました。

文安2年（1445）、穆佐城は、土持氏とともに侵攻した伊東祐堯によって陥落し、以後130年間、穆佐城は伊東氏の支配となりました。

天正5年（1577）、伊東氏の豊後落ちにより、穆佐城は再び島津氏の支配するところとなり、慶長5年（1600）には、伊東方の稲津勢が穆佐に攻め入り、城の木戸一重を打ち破るなど、穆佐城は江戸時代の初めまで戦乱の舞台となりました。



しまづただくにのたんじょうすぎ

📷 島津忠国の誕生杉（市天然記念物）

第9代当主島津忠国の誕生を記念して植えられた杉で、「御誕生杉」または「御年比較の杉」とも呼ばれています（杉がある場所は「坪の城」と呼ばれ、忠国が誕生した曲輪と伝えられています）。

『三国名勝図会』には、「周囲は三丈余（約9m余）、2株の間は約3尺（約1m）隔たり、根や幹、枝が巨大に繁茂し、枝が垂れて地につき、そこから根が生じ、2株といえども数株あるかのような様子となっている。高く聳えること数十丈（1丈が約3.78m）、横に繁茂すること1反ばかりの状態で見ると人すべてが聞かずして神木であることを知る」と記されています。

初代の杉は明治7年（1874）に焼失しました。現在は、明治20年頃に地元の篤志家によって植えられた杉が残されています。



たかきかねひろせいたんち
📷 高木兼寛生誕地（市史跡）

高木兼寛（1849-1920）は、当時難病といわれた
かっけ病の予防法をはじめ、日本医学界に多大な
貢献をした人物です。兼寛は、東京慈恵医科大学
や日本初の看護学校を創設するとともに、宮崎神
宮の大造営など多くの偉業を成し遂げました。

この生誕地は、昭和61年9月に記念公園として完
成しました。土地（762㎡）、記念碑、庭園樹木一
式は、平成2年の高木兼寛先生銅像除幕式の日
に、学校法人慈恵大学から高岡町へ寄贈された
ものです。



ごしょうじあと
⑧ 悟性寺跡

しまづひさとよのはか
📷 島津久豊の墓（市史跡）

悟性寺跡には、第8代当主島津久豊の墓が残り
ています。久豊は、応永10年（1403）に穆佐城に
入り、伊東氏の加江田城を攻め、池尻城・白糸
城・細江城を築きました。その後、伊東氏に穆佐
城を奪われますが、応永31年（1424）に再び伊東
氏を攻め、穆佐城など大淀川以南の地を手に入れ
ましたが、翌32年、久豊は51歳で逝去しました。

江戸時代、悟性寺の久豊の墓については、藩と
寺の間で一騒動あったようで、藩は悟性寺に墓が
あることを容易に認めようとはしませんでした。
ようやく藩が認めたのは幕末のことで、現在の墓
は、この時に建てられました。



しもくらあわのじんじゃ
⑨ 下倉栗野神社

下倉栗野神社は、天明2年（1782）に高浜栗野神
社から遷宮されました。

元々、高浜栗野神社の祭礼で催される流鏝馬神
事では、穆佐小山田組の神馬が先頭に立ち、鏝矢
を射るしきたりが厳守されていました。ところが、
天明元年の祭礼で、高岡飯田組が多勢に物を
言わせて神馬を先頭に立てたところ、怒った小山
田組の射手が飯田組の射手を射、双方の若者の間
で乱闘騒ぎになりました。これがきっかけとなり、
下倉栗野神社が新たに造営されたと言われて
います。

現在の拝殿・舞殿・本殿は、嘉永5年（1852）に
建てられたもので、本殿の両脇柱と虹梁には、龍
と瑞雲を造り出し、中央に島津家の家紋をつける
という賑やかな趣を見せています。



去川地区

さるかわのいちょう

⑩ 去川のイチョウ（国天然記念物）

このイチョウは雌株で、一説には島津氏初代忠久（1179-1227）がこの地に植えたとされ、樹齢800年とも伝えられています。

幹の周囲（胸高）約10m、高さ41m、枝張りは東に約6m、西に約7m、南に約9m、北に約15mあります。平成5年9月3日の台風13号の襲来により、太枝の大部分が折れるという被害に遭いましたが、翌年に樹木蘇生治療を行い、現在は樹勢を回復しています。



さるかわのせきあと

⑪ 去川の関跡（県史跡）

薩摩藩は、藩境防備のため、「境目番所」と呼ばれる9つの関所を設けました。去川の関もその一つで、正式には「去川御番所」と呼ばれていました。当時、この2つの関所の外側に位置する高岡・穆佐・綾・倉岡の4ヶ郷を「関外四ヶ郷」、関所より内側を「内場」と呼び、双方の行き来にも通行手形を必要としました。当時から通行人の取締りが厳しい関所として知られ、「薩摩去川の御番所がなけりゃ 連れて行くもの身どもが郷に」と地元の俗謡にも謡われています。



ふたみけぼせきぐん

⑫ 二見家墓石群（市史跡）

二見家は、初代二見石見守久信以来、11代にいたるまで去川の関の御定番を勤めました。ここには、4代以降、歴代の墓石群が残されています。



⑬ 旧二見家住宅（県有形文化財）

二見家は、去川の関の御定番を勤めた家です。関所が設置された天正年間（1573-92）以降、代々この地に居住してきました。二見家住宅の建築様式には、「二棟造り（分棟型）」と呼ばれる南九州の民家の特徴が取り入れられています。右側の棟は「座敷棟（オモテ）」と呼ばれ、来客を迎える接客空間として利用され、左側の棟は「居室棟（ナカエ）」と呼ばれ、二見家の私的な空間として利用されました。

二見家住宅は、同家に残された古文書には「去川御仮屋」と記されています。「御仮屋」とは、薩摩藩では地頭や領主の詰所のことを言い、同様に二見家住宅が公的な「役所」として位置づけられていたことがうかがえます。藩主など、薩摩街道を通行する上級身分の者が宿泊・休憩する建物としても使用され、嘉永6年（1853）には藩主島津斉彬、明治4年（1871）には勅使岩倉具視がこの建物に立ち寄りしました。

建築の時期は、「平成の大改修」の調査、及び二見家文書の記述によって「座敷棟（オモテ）」が安政2年（1855）、「居室棟（ナカエ）」が明治28年（1895）ということがわかりました。



解体工事で現われた小屋裏 ▶

中野地区

きよたけこうなかの

① 清武郷中野

飢肥藩では、領内各地に地頭を配置して藩内を統治しましたが、清武郷（清武・田野・赤江・木花・青島の範囲）の地頭は諸地頭を統括する立場として位置づけられ、家老にも匹敵する家格とされました。このため、清武郷の中心地である中野には地頭所が置かれ、周囲には武家屋敷が建ち並びました。

安井息軒の父滄洲の時代になると、清武郷では学風改善の機運が生まれ、文政10年（1827）に清武学問所「明教堂」が建設されました。その名の由来は、息軒が子供の頃に学んだ中山寺の明教和尚の名にちなんで名づけられたとされています。

📷 みやざきしやすいそっけんきねんかん 宮崎市安井息軒記念館

清武の歴史学習の拠点として、平成14年に中野の地、「郷校明教堂」があった場所のすぐ隣に建てられました。安井息軒に関する資料を中心に、清武郷の歴史や考古資料の展示を行っています。

館内には「安井文庫29点」「安井息軒衣服18点」「安井息軒書簡」「炎尾権現御本地文書」「秋葉大権現」などの市指定有形文化財も収蔵しています。

安井文庫は、昭和10年（1935）の昭和天皇の行幸を記念して創設されたもので、当初は、安井息軒旧宅に隣接して設置されていました。この文庫には、安井息軒及び父滄洲自筆の遺稿や書籍のほか、郷校明教堂の棟木、息軒遺稿の版木なども納められています。



📷 やすいそっけんきゅうたく 安井息軒旧宅（国史跡）

安井息軒は幼名を順作、字を仲平といい寛政11年（1799）中野に生まれました。父滄洲のもと幼いころから学問に励み、のちに遊学し昌平坂学問所や松崎塾などで学問を積みました。28歳で帰郷し、郷校明教堂や藩校振徳堂で教鞭をとりましたが、40歳で江戸に私塾三計塾を開き、多くの弟子を育てました。文久2年（1862）には、幕府の儒官となるなど、江戸時代を代表する大儒学者として知られています。

宮崎市安井息軒記念館の道路を隔てた向かいに、その生家があり、天保2年（1831）に飢肥城下へ転居するまで、安井家が居住していました。敷地は約600坪、約29坪の茅葺き平屋建ての家屋で、昭和54年に国の史跡に指定され、現在も公開されています。



いとうけきょうぼ
📷 伊東家僑墓（市史跡）

中野神社の東側にあります。初代伊東祐兵から12代祐丕に至る歴代飢肥藩主の僑墓です。僑墓とは仮の墓のことで、江戸時代、清武郷の武士たちが盆・彼岸・正月の藩主の墓参りに行くのに、飢肥では遠いので、この僑墓を建て参拝し、忠誠を誓ったといわれています。



れきだいやすいけぼち
📷 歴代安井家墓地（市史跡）

家伝によれば、安井家は奥州出羽の安倍氏に端を発し、その後上野国（群馬県）安井村を領したことから安井姓を名乗ったとされています。南北朝時代に九州に下向した畠山氏に従って日向国に移り住み、その後伊東家に仕えるようになりました。

安井家は代々軍学に精通し、息軒の四代前の安井朝宣の時に、飢肥から清武へ派遣され、藩士に兵学を教授しました。安井家墓地には、朝宣とその妻、その子朝中とその妻、その子朝長とその妻、楚也（息軒の母）、朝淳（息軒の兄）とその娘、圭三郎（息軒の孫養子）、恭一（息軒の曾孫の子）など、朝宣から恭一に至る9代の墓があります。



船引地区

ふなひきじんじや
② 船引神社

社伝によれば、寛治元年（1087）の創建で、当初は正八幡宮、または八幡宮と称したと言われています。弘治2年（1556）の「土田帳」（予章館文書）には「舟引八幡領」とあり、社領として「舟引上分」「同所下分」「木原」「大津か（大塚）」の内に田数2町6反と屋敷1ヶ所が記されています。

現在の社殿は、拝殿は嘉永3年（1850）に、本殿は嘉永6年（1853）に再興されたもので、明治14年（1881）には拝殿が瓦葺となっています。

船引神社には、作祈禱神楽と呼ばれる春神楽が伝承されており、春の社日には境内で奉納されています。



民俗芸能 船引神楽(県無形民俗文化財) ➡

ふなひきじんじゃうりゅうまきばしら
📷 船引神社雲竜巻柱（市有形文化財）

船引神社本殿の向拝柱には、雲の中を泳ぐ竜が浮き彫りにされた姿が見られます。柱の高さは2m35cm、幅は25～30cmで、嘉永6年（1853）11月吉日の日付と、宮崎本郷北方の大工川崎伝蔵の墨書が残されています。

この種の雲竜巻柱は、県内では、県北の延岡藩領と県央から県西にかけての薩摩藩領・幕府領に多く見られ、栗野神社（現宮崎市高岡町）や本庄八幡神社（現国富町）などに例を見ます。



きよたけのおおくす
📷 清武の大クス（国天然記念物）

船引神社の境内にあり、祭神八幡大神にちなんで、別名「八幡楠」とも呼ばれています。根周り18m、幹周り13.2m、高さは26mあり、内部は地上8mくらいまでが空洞で、その底は8畳ほどの広さになっています。樹齢は900年を超えるとも言われる県下最大級のクスノキです。



ふなひきじんじゃのやっこそう
📷 船引神社のヤッコソウ（市天然記念物）

ヤッコソウは、シイの木の根に群で生える寄生植物で、高さは約5～7cmほどになります。鱗片葉が十字形に対生した外観が「奴（やっこ）」に似るためヤッコソウと呼ばれています。発生するのは秋で、船引神社においては11月中頃が見頃となります。沖縄から九州、四国の南部のみに分布する極めて珍しい植物で、市指定天然記念物であるほか、絶滅危惧種としてレッドデータブックにも掲載されています。



みろくじろくじそうとう

③ 弥勒寺六地藏塔（市有形文化財）

清武町船引地区は、「日向国図田帳」には弥勒寺領「船曳五十丁」とあり、古代から中世にかけて豊前国宇佐八幡宮の神宮寺として建立された弥勒寺の荘園として支配されました。中世以前には、この地にも弥勒寺という寺院があったようで、平部嶠南の著した『日向地誌』には、「船引神社の北一町許ニアリ」と記されています。

現在、この六地藏塔は、船引神社の東方150mの水田の片隅にあります。高さ90cmの台石の上に、高さ35cm、直径35cmの龕部があり、その上に厚み13cm、直径67cmの扁平の石が笠として載せられています。台石に文字が書かれていたとありますが、現在では判読できない状態で『日向の金石文』（昭和17年、宮崎県発行）では、この年号を「□□□八年辛巳」とし、永正18年（1521）に比定しています。

地藏は、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天の六道の姿となり、一切の衆生を救おうとした願いをこめて建立されたものです。



じんぐうじろくじそうとう

④ 神宮寺六地藏塔（市有形文化財）

船引神社の西方50mの市道沿いにあり、神宮寺にまつわる六地藏塔として伝えられています。神宮寺は、中世以前にこの地にあった寺院で、平部嶠南の著した『日向地誌』には、「弥勒寺の西四十間許ニアリ」と記されています。

この六地藏塔は、六角形の基礎の上に、八角形の幢身、六角形の笠より成る単制形式で、幢身の像の下には永禄12年（1569）2月の年号が刻まれています。



うちやまでらにおうそう

⑤ 内山寺仁王像（市有形文化財）

内山寺参道の石段を登りつめたところにあります。飢肥藩清武郷今江村（現宮崎市木崎）出身の禅僧であった仏師の平賀快然が彫刻したもので、銘には延享2年（1745）6月に、大久保の祇園山大仙寺の住職功厳恵勲が願主となり、実父母にあたる成合厳右衛門・明春夫妻の菩提を弔うために建立したことが刻まれています。



くろきたはつでんしょ

⑥ 黒北発電所（国登録有形文化財）

明治40年（1907）に、大和田伝蔵氏ほか県内有志で設立した「日向水力電気株式会社」により建設された、県内最初（九州でも2番目）の発電所です。

建物の外壁は、近隣で採取される「清武石」を使用し、アーチ型で縦長の採光窓が特徴的で、明治時代末のモダンな建築となっています。内部には、ドイツ製の水車と発電機があり、清武川の水を使って、100年の時を越えた今もお力強く動き続けています。現在稼働している発電所としては国内最古級となります。敷地内には、明治44年に同社が建立した記功碑があります。



きよたけかみいのはるいせき

⑦ 清武上猪原遺跡（県史跡）

船引地区の清武川左岸のシラス台地上に立地し、旧石器時代から近世までの複合遺跡です。これまで5箇所で行った調査で、調査面積は約36,000㎡に及びます。中でも、縄文時代早期の資料は膨大で、集石遺構389基、炉穴75基、陥し穴状遺構25基が検出されています。

また、平成17年度から21年度にかけて行われた第5地区の調査では、縄文時代草創期の竪穴住居跡14棟と大量の遺物が発見され、全国最大級の縄文時代草創期の集落遺跡として高く評価されています。現在、遺跡の一部を県の史跡とし保存しています。



城内地区

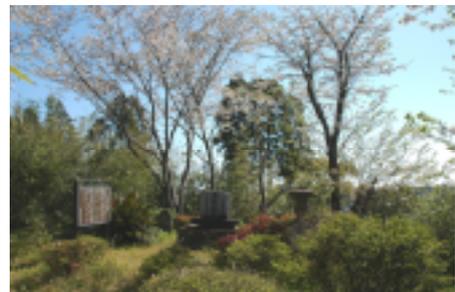
きよたけじょうし

⑧ 清武城址（市史跡）

清武川左岸の丘陵上に立地し、広さは南北380m、東西320mになります。築城の時期ははっきりしませんが、延文6年（1361、北朝年号）の「一色範親感状」（土持文書）には、すでにその名が見えます。清武城は、応永4年（1397）に島津氏によって攻められ、伊東・島津の攻防の端緒ともなりました。

文明17年（1485）には、伊東氏の飢肥攻めの際、後詰として入城した伊東祐堯が、この城で没しています。その後も伊東氏の拠点城郭として、伊東48城の一つとなっています。

伊東氏の没落後は島津方の城となりますが、天正15年（1587）の豊臣秀吉の九州征伐後、伊東家が再興されてからは、稲津掃部助などが城主となりましたが、元和元年（1615）の一国一城令により廃城となりました。



いなづかもんのすけのはか
📷 稲津掃部助の墓（市史跡）

稲津掃部助は、伊東祐兵の家臣で清武城主となった人物です。関ヶ原の戦いに際し、西軍側の高橋元種の家臣榎藤種盛が守る宮崎城を攻め落としましたが、高橋元種が東軍に寝返っていたことから、宮崎城は高橋氏に返還されました。

慶長7年(1602)、掃部助は宮崎城を攻撃した責任を取らされ、清武城内で自刃しました。この墓は、掃部助の霊を弔うために建てられましたが、藩船への崇りを恐れて海とは反対の西向きにしたと言われます。



木原地区

くろさかかんのん
⑨ 黒坂観音

くろさかかんのんにおうそう
📷 黒坂観音仁王像（市有形文化財）

もともとは長徳山勢田寺の山門として建立されたもので、現在は黒坂観音堂の入口正面に安置されています。明治初めに勢田寺が廃寺となった後も仁王像はそのまま残されていましたが、大正10年（1921）に現在地に移されました。

作者は内山寺仁王像と同じ平賀快然で、当時の勢田寺住職であった快庵の代に、木原郷中の寄進によって建てられたものです。高さ1m95cm、横幅1m、奥行45cmで、銘文は不明瞭となっていますが、一説には、宝暦3年（1753）建立とも伝えられています。



せんじゅかんのんじざいぼさつ
📷 千手観音自在菩薩（市有形文化財）

もともとは長徳山勢田寺に祀られていましたが、明治初期の廃仏毀釈に際して、黒坂観音として現在地に移されたものです。像の高さは97cm、寄木造の立像で、鎌倉時代の特徴を残しています。



やまうちせきとうぐん
📷 山内石塔群（市史跡）

昭和57年に宮崎学園都市から現在地に移設されました。

五輪塔約450基、板碑約80基が確認され、数基単位で五輪塔を建立した場所や「コ」の字形で五輪塔や板碑を並べた場所など、特徴的な配置も幾つか見られました。紀年銘がある石塔で最も古いものは応永25年（1418）ですが、さらに古い特徴を持つ五輪塔が存在することから、この石塔群の建立時期は、鎌倉時代末期から江戸時代初期の約300年間に及ぶものと考えられています。



まついいげき
⑩ 松井井堰

松井用水へ水を取り入れるための井堰です。松井用水は、清武郷8ヶ村の水不足を解消するために、飢肥藩士の松井五郎兵衛が主導して開削したもので、寛永16年（1639）年12月に起工、翌3月に完成しました。

この用水路工事は、計画地に丘があり、そこを貫通させるための深さ10m、長さ500mにわたる掘削を必要とした難工事であったそうです。井堰は、上使橋の下流側にあり、近くには堰堤改良記念碑が建っています。

じょうしばし
⑪ 上使橋

清武川中流、木原にある飢肥街道の渡しです。日向地誌には「上使橋渡」とあり、普段は徒歩や船で渡っているが、幕府の巡検使が通るときには必ず板橋を架けたため地名となったと記されています。

初めて上使橋が架けられたのは、昭和4年（1929年）のことですが、木製であったため幾度かにわたり台風などで流されていました。現在の永久橋となったのは、昭和42年（1967）のことです。

